

# 清末小説から 152

2024.1.1

- 蘆花「毒薬」の漢訳4種——喋血生、無歎羨斎主、佚名1、佚名2……樽本照雄 1
- 抱一庵「少年使者」と喋血生「少年軍(二)」……荒井由美15
- 抱一庵『ABC組合』と喋血生「少年軍(三)」……神田一三20
- 喋血生の評論3篇……沢本郁馬33
- 林譯《花因》、《想夫憐》、《眇郎喋血記》原著鑒定・補遺於林紓偽訳《名家點將》  
……古二徳48
- 清末小説から32、53

★本年は林紓没後100年です。古二徳(César Guardé-Paz) 氏論文を掲載することができて幸甚

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方



知られる。

蘆花「毒薬」の漢訳4種  
——喋血生、無歎羨斎主、佚名1、佚名2

樽本照雄



はじめに

蘆花訳「毒薬」については早くから渡辺浩司による指摘がある。「徳富蘆花『探偵異聞』(民友社1900.11.24)中の「毒薬」(もとは「露国探偵秘聞」で『国民新聞』1897.10.10-22掲載)」という。単行本『探偵異聞』には蘆花の名前は記載されていない。しかし蘆花訳で



その原作は藤元直樹によるとディック・ドノヴァン(DICK DONOVAN)「現代のボルジア」[A MODERN BORGIA] (“THE CHRONICLES OF MICHAEL DANEVITCH OF RUSSIAN SECRET SERVICE,” LONDON: CHATTO & WINDUS, 1897. [藤元19]。影印本)である。

「現代のボルジア」とはその昔貴族ボルジア

家が毒薬を使って多くの政敵を暗殺したことを踏まえている。蘆花は単行本に収録するにあたり直接的な「毒薬」に改題した。

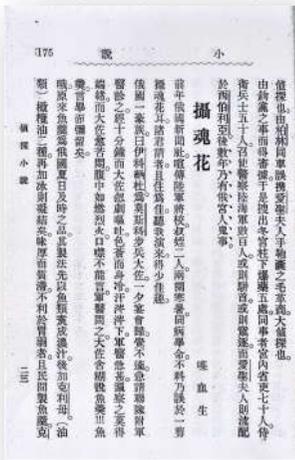
図式化すれば、ドノヴァン→蘆花→漢訳4種、ということになる。

蘆花の同一作品が1903年から1907年までに漢訳4種類になった。といってもひとつは文言訳を白話で書き換えたものだ。それでも多い。清末の漢訳者は該作品によほど深い興味を持ったらしい。

漢訳4種

漢訳された4種は先行研究によれば次のとおり(中村忠行、杜慧敏、陳清茹、梁艷+王玉などの研究は樽目録の注釈欄を参照のこと)。便宜的に数字を振る。

1 喋血生「攝魂花」『浙江潮』第3期 光緒二十九年三月二十日(1903.4.17) 文言



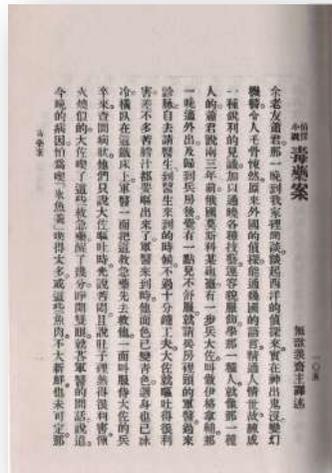
「攝魂花」という題名は「吸魂花」という意味だ。魂を吸い取る。「噬魂」と同じ。魂を食いちぎる花とはなにか。すなわち色仕掛けで男を毒殺し財産を奪う美女の物語となる。内容をそのまま漢訳題名にした。

本漢訳についても徐兆璋<sup>\*1</sup>が次のように記述している。「毒薬案」は「攝魂花」および「俄国包探案」と同じ内容という。

毒薬案，無歆羨齋主訳。／《浙江潮》有喋血生所訳《攝魂花》一卷，《繡像小説》有《俄国包探案》一卷，均与此本復出。390-391頁(また429頁にも詳しい説明がある)。

「俄国包探案」については3で述べる。徐は発表と同時期に「毒薬案」「攝魂花」「俄国包探案」の3種を読んでいたことになる。

2 無歆羨齋主訳述「(偵探小説)毒薬案」『新小説』第5号 光緒二十九年閏五月十五日(1903.7.9) 白話



『新小説』 影印本  
のち『最新偵探案彙刻』(広智書局1906.2.9)所収。無歆羨齋主については不詳。黒岩涙香日記の複数を漢訳している。

3 佚名1「俄国包探案(目次は新訳俄国包探案)」『繡像小説』第21-22期 刊年不記 白話



この3と次の4は佚名だから区別をするために佚名1、佚名2とする。『繡像小説』の実際の刊年は推定甲辰1904十月一十一月。漢訳名からすると『国民新聞』から直接漢訳したかと思いきやそうになる。だが渡辺浩司がこれについてもすでに書いている。「徳富蘆花『探偵異聞』(民友社1900.11.24)中の「毒薬」(もとは「露国探偵秘聞」で『国民新聞』1897.10.10-22掲載)の直接訳ではないが同内容」。これが正しい(後述)。中村忠行が「水田南陽訳『露国怪物探偵魔王』と関係あるか」と述べたことがある。関係はない。

4 佚名2「偵探奇譚」『盛京時報』光緒三十三年二月二十五日(1907.4.7) - 三月十四日(4.26) 文言



渡辺浩司が『盛京時報』影印本を調査した。

作品は部分的にしか残っていない(四1907.4.7/六一十二1907.4.26)と説明している。筆者も国立国会図書館所蔵の影印本で4月分の7日(四)、11日(六)、14日(七)、16日(八)、18日(九)、22日(十)、24日(十一)、26日(十二完)の全8回を確認した。

冒頭部分の検討

冒頭部分の検討からはじめる。

【原作】 During his long and remarkable career, Danevitch was called upon to solve

problems of a very varied nature, and, while his efforts were not always crowned with success—and he never hesitates in his journals to confess his failures—the percentage of his triumphs was very large. p.33

ダネヴィッチはその長く注目にあたいする経歴において実にさまざまな問題を解決するよう求められてきた。その努力はいつも成功したとは必ずしも言えなかったが—彼は日記で失敗を告白するのをためらわなかった—しかし彼の勝利の割合は非常に大きかった。

ダネヴィッチはロシア諜報部の大探偵ミカエルだ。冒頭部分の記述者はミカエルから日記を含むすべての資料を譲り受けこの物語を編纂した人物である。該当部分の蘆花訳を見る(ルビ、傍線省略)。

【蘆花】老友穴栗在世的砌り一日余に語りけるは、西洋の探偵は中々巧みなるものなり、彼国にては探偵と云へど随分一廉の見識を備へて数ヶ国の語に達し芸能拙なからず容貌服装を變するの巧みなる俳優も及ばざる者ありと云ふ、 83頁

原作とは違うことを蘆花は記述している。蘆花が作った穴栗は原作のミカエルに相当するはずだ。しかし蘆花はミカエルとは別人に設定していて具合が悪い。

原作では冒頭部分に続いてミカエルが生まれつきの探偵であったことを説明する。彼は完璧な役者であり、教養があり、外国語も複数に堪能であったと述べる。蘆花はそれを簡約して上のようにまとめた。蘆花は翻案しているのだからそういうやり方もある。

次は喋血生だ。

【喋血生】前年俄国新聞社。喧伝陸軍将校。叔姪二人。両閱寒暑。同病畢命。不料乃誤於一剪攝魂花耳。諸君請者。且住為佳。聽我演來。得少佳趣。 175頁

一昨年のロシアの新聞社は陸軍将校である叔父と甥のふたりが2年のうちに同じ病気で命を落としたと伝えた。思いがけず偶然に吸魂花をちょっと摘んだということだ。諸君、しばらく私が話すのをお聞きなさい。おもしろいはず。

こちら最初から蘆花とは違うことを述べている。いわば喋血生による「前言」という解説だ。ふたつの事件をまとめた。叔父と甥のふたりが同じ病で命を落としたのは確かだ。最初は食中毒が原因だと考えられていた。

事件の導入部の「前言」として要領よく書かれている。また「吸魂花をちょっと摘んだ[一剪攝魂花]」は「攝魂花」の内容を知らない読者には謎を感じさせる効果がある。魂を食いちぎる花とはなにかという謎だ。「花」だから女性に関係しているのか、と想像もするだろう。探偵小説の漢訳題名としてすぐれている。

喋血生は蘆花が要約した探偵について紹介した文章はすべて省略して直接事件に話を進める。蘆花の日記と並べて示す。

【蘆花】両三年前の事なりとか、露国莫斯科(もすくわ)鎮台の歩兵大佐姓名はエーと左様左様イグナトフと云ふ男一夜外出先きより兵舎に帰り来しが、少し不塩梅なりとて聯隊附軍医を呼びに遣りたり。呼に遣りしより軍医の来し迄十分とは経たざりしが、其間に大佐は劇しく嘔吐して、軍医の来着したる時は色蒼ざめ身体冷え切りて横臥し居たれば、 84頁

【喋血生】俄国一豪族。曰伊科納杜。為莫斯科歩兵大佐。一夕宴会帰。覺不適。急請聯隊附軍医診之。經十分鐘而大佐忽劇嘔吐。

色蒼而身冷。汗涇涇下。 175頁

ロシアの一豪族でイグナトフという莫斯科歩兵大佐はある夜宴会から帰ってくると気分が悪いとって聯隊附軍医に診てもらった。10分たつと大佐は突然激しく嘔吐して色蒼ざめ身体は冷えて汗をしたたせさせた。

上述のとおり喋血生は前言を加筆し底本の冒頭を省略した。底本どおりに漢訳する考えがもとからない。底本を材料に使用して自由に書き換えるのが喋血生の方法だ。それを知れば上の部分は直訳とは言えないにしても内容はほぼ伝えている。よくできている方だ。

無欿羨齋主漢訳を見る。

【無欿羨齋主】余老友蕭君。那一晚到我家裡閑談。談起西洋的偵探來。實在神出鬼沒。變幻機警。令人毛骨悚然。原來外國的偵探。能通幾國的語言。精通人情世故。練成一種銳利的見識。加以通曉各種技芸。連容貌服飾。學那一種人。就像那一種人的。 105頁

私の古い友人蕭君がある晩わが家へやって来て雑談をした。語るのは西洋の探偵が実に神出鬼没、変幻自在であって人を大いに驚かせることだ。元来外国の探偵は数カ国語に通じ人情世故にも精通しある種鋭利な見識に熟練している。さらに各種技芸に通曉し容貌服飾すらもある人物そのままに真似るのだった。

無欿羨齋主は栗穴に「蕭」を当てて底本に忠実であろうとした。翻訳の姿勢がよい。だから喋血生漢訳と比較してしまう。喋血生がここを省略したのに比較すれば無欿羨齋主の漢訳は蘆花日記をそのままである。イグナトフ大佐(イグナトフ)の死亡状況も白話で直訳しているとだけ言っておく。

それと大きく異なるのが佚名1だ。

【佚名1】 話説俄羅斯国有兩個大京城。一個旧京。叫做莫斯科。一個新京。叫做聖彼得堡。 1丁オ

さてロシアにはふたつの大都市がある。ひとつは旧京でモスクワといい、ひとつは新京でサンクトペテルブルクという。

驚いたことにモスクワとサンクトペテルブルクの説明から始めている。清末の読者にはロシアの代表的大都市の繁華状況を言わなければならないと訳者は考えた。「これらの話は前置きではあるけれどもどうしてもまず説明しなければならないことなのだ [這些話。雖則是開場。但却也不能不先行表白幾句] 」と弁解している。不必要だと思う。加筆するくらいならば探偵についての説明を漢訳すればよかった。喋血生と同様にそこは省略した。それには理由がある(後述)。なかなか本筋にたどりつかない。

「さてロシアに財力と権勢のある名家があった。姓は伊、名を坤圀という。旧京モスクワで陸軍歩兵大佐の職にあった [却説俄国有一箇大家豪貴。姓伊。名叫坤圀。在莫斯科旧京。官居陸軍歩兵大佐之職] 」と述べる。イグナトフを「伊」と「坤圀」に分解するという大胆さだ。ここから本題に入るかと思う。ところがさらに加筆する。「伊家は本来代々が武官であり真に將軍の家柄であるといえる。加えて外国では從來から武を重んじ我ら中国で武官を軽んじるのとは違うから伊家はロシアにおいて名家なのである [伊家本来世代是做武官的。真可算得將門之子。加之外国向來重武。不比我們中国輕看武官。所以伊家在俄国。也是一門望族] 」

佚名2のこの部分は未見。

ここまで説明してようやく大佐死亡という段取りになる。

冒頭部分を比較検討すれば漢訳として無欲羨齋主のものが蘆花日記に誠実だ。

検討を継続する

死亡の原因は食中毒だと判定された。原作は「氷で冷やした魚のスープ [iced fish soup] 」(p.34) と表記している。こういう小さな箇所をどう翻訳するかによって訳者の姿勢が明らかになる。

まず原作と蘆花日記を見る。

【原作】 The fish soup is a very common dish in Russia. It is made from various kinds of fish boiled to a pulp. It is then highly seasoned, thickened with rich, luscious cream; a quantity of olive-oil is next added, and the mess is iced until it is nearly frozen. pp.34-35

魚のスープはロシアでは非常に一般的な料理だ。さまざまな種類の魚を煮てどろどろにする。その後、多くの甘美なクリームで非常に濃厚に味付けされる。次にオリーブオイルを適量加えほぼ凍るまで氷で冷やす。

【蘆花】 此魚羹(ぎょこう)なるものは露西垂人の大好物なる由にて、其製法先づさまざまの魚類をとろとろになるまで煮つめ、之に十分の味つけてさて濃きクリームを加へ、橄欖油を加へ、然る後氷を加へて殆ど固まる迄にしたるものにて、 85頁

蘆花は「魚羹」という最適の日本語を当てた。煮凝りと考えてよい。この部分は直訳している。「クリーム」はそのまま、「オリーブオイル」は橄欖油である。

漢訳4種はまとめて示す(訳さない)。

【喋血生】 哦。原来魚羹為俄国夏日及時之品。。其製法先以魚類煮成濃汁。後加克利母(油類)橄欖油二種。再加冰則凝結矣。 175頁

【無欲羨齋主】 原来這些魚羹。俄羅斯人是最喜歡喫的。這魚羹製法。先把各種魚肉。

熬得溶爛。再加些橄欖油。或奶酪。然後冰冰成一塊。 106頁

【佚名1】原来魚羹這樣東西。俄国到了夏天。拿他当做及時的美品。製羹的法子。是先魚類。煮成濃汁。後加入克林油。和橄欖油二種。就結成了凍。 1丁ウ

【佚名2】未見

喋血生はほぼ蘆花に近い。夏を加えた。クリームは「克利母（油類）」と音訳して注で意味を示す。無歎羨齋主も同じ。ただし加えるのがオリーブ油か「奶酪」のどちらからにしたのは不足する。両方に加えるのが正しい。またクリームには「奶油」という漢語があるが奶酪では微妙に違う。佚名1にも喋血生と同じく夏がある。クリームに「克林油」を当てて半分を音訳した。以上を見ればいずれも真摯に漢訳している。

ひとつの伏線があることを指摘する。大佐は夫婦仲が悪く別居しておりそれほど多くない遺産は甥が所有することになった。遺産が少なかったその理由を説明している。原作者はこの部分に意味を持たせた。

【原作】and it was more than hinted that he had squandered his means and substance on a certain lady to whom he had been greatly attached. p.35

彼が大いに愛情を抱いたある女性のためにその財産資産を浪費してしまったということも少なからず示唆された。

【蘆花】其後は何とか云ふ婦人にかゝり合ひて大分資産を消費せしやの風聞ありて、 86頁

【喋血生】省略（別居していたのは大佐だが甥についてのものと誤解している） 176頁

【無歎羨齋主】有人説大佐当日。另与一個婦人有交情。為這婦人。擲金不少。 107頁  
（離婚した）大佐はその頃ある婦人と付

き合っておりその婦人のために少なからぬ金を使った、という人がいた。

【佚名1】省略（別居していたのは大佐だが甥についてのものと誤解している） 1丁ウ

【佚名2】未見

女性の存在を示唆する蘆花と同じなのが無歎羨齋主だけだ。その一方で喋血生と佚名1がともに誤解しているのも奇妙に一致している。なによりも喋血生と佚名1が伏線を省略したのは失敗だった。記述が一致していることは別の個所にも見える。甥の大尉がもともと浪費家であった。そこに叔父の遺産が入ってきたから賭博、婦人に金を注ぎ込んだ。蘆花は遺産の金額を具体的に翻訳しなかった。

【蘆花】抑々此大尉と云ふは生来の放蕩者にて、叔父の遺産をつぎてより賭博婦人と乱暴狼藉到らざる所なく、 87頁

【無歎羨齋主】却説巴拉奴輔大尉。生平是很放蕩的。自從得了叔父的遺産。天天与這些賭博婦人来往。鬧到不成說話。 107頁

バラノツフ大尉というのは生来の放蕩者で叔父の遺産を得てから毎日賭博婦人と往来し常軌を逸する暴れようだった。

無歎羨齋主の漢訳は蘆花を直訳している。

### 喋血生と佚名1の類似点

ところが喋血生と佚名1はそれとは違う。甥の大尉が妻と不仲だったと誤解した後に続く個所だ。

【喋血生】其家本殷富。僅二年間大尉已消金三十万。得乃叔父之遺産。復事揮霍。 176頁

その家はもとは非常に豊かだったがわずか2年間で大尉は30万を消費した。叔父の

遺産が入ったので再び金銭を湯水のように使った。

【佚名1】但是家財殷富。甚是奢麗榮華。計兩年工夫。伯蘭已用去了三十萬金。如今又得了叔父的遺產。更是鬆手。到處揮金如土。1丁ウ

しかし家財は豊かでとても豪奢富貴をきわめていたが2年のあいだにバラノツフは30万金を使い果たした。今叔父の遺産が入ったのでさらに手をゆるめ至る所で金銭を湯水のように使った。

佚名1は喋血生の漢訳を参照している。そうでなければここまで一致はしないだろう。基本的に同じであってほかの個所では佚名1なりの加筆も行っていることも言うておく。大尉のもとには叔父の遺産とは別に30万という金があった。その数字が同じだ。どこから来たのか。

蘆花は翻訳しなかったが原作には叔父の遺産金額が書いてある。

【原作】 Although he had died poor, relatively, his nephew had got something like three thousand pounds, besides a fair amount of jewellery, some plate, books, and other odds and ends. p.36

彼は比較的貧しい死を遂げたが、彼の甥は3000ポンドほどの金とかなりの量の宝石類、皿、本、その他諸々を手に入れた。

ロシアなのにルーブルではなくここではなぜポンドなのかは不明。別の場所ではルーブルを使用している。原作の不統一だ。ここに見える3000という数字が喋血生と佚名1の30万と似ている。同一ではないし設定が異なっているから原作にもとづいたものではない。しかしなぜ数字の3が一致するのかよくわからない。これも偶然か。問題として残す。

## 毒物の検出と追及

大尉は伯父の大佐と同様の症状を示して死亡した。死因は魚羹中毒だとされた。ところがモスクワの新聞が毒殺だという投稿を掲載して殺人事件に発展する。

検査の結果その毒葉は黒色ヘレボア black hellebore (ヘレボルス・ニゲルHellebrusu.niger)ということが判明する。植物名クリスマスローズから生成される毒物だ。

蘆花が「黒色ヘレボール」とした。漢訳はそれぞれ喋血生「海婁濮兒」、無歎羨齋主「黒色「耶列波爾」」、佚名1「海留卜兒」だ。漢字は異なるが音訳してとほぼ同じになる。特に喋血生と佚名1が近い。

ただ佚名1だけがクリスマスローズ(基督薔薇花)について「それが開花するのはちょうどキリスト生誕祭のころだからその名前がある[因為他開花。正在耶穌基督誕生節的時候。所以起了這箇名目]」(3丁オ)と追加説明した。しかもそれにかこつけて文中に身を乗り出してくる。「ここまで述べて私は話したいことがある。外国の医学は我々中国に比べて何倍くらい高いとあなたは思われるか。……[我說到這裏。有一句話要表明。你想外國的醫道。比我們中國高到幾倍。……]」。毒物を検出できたのもロシアに学校があったからだ。学問の必要性を強調して加筆を続ける。「学校は多く開くのが最も重要だ。我々中国の学校は盛んではないし学生も多くはない。それでこの衰弱した体たらくになっている[学堂是最重要多開的。我們中國就是學堂不盛。學生不多。所以弄到這步衰弱的田地]」(3丁ウ)。佚名1はなにかと中国を引き合いに出して加筆説明したが。なにかの補償心理が作用していると考える。

モスクワの事情を説明して悪の巣窟というべき場所が多く犯罪が多発していると原作にはある。大佐と大尉がそういう場所で命を失った。喋血生はそれを次のように簡略化して述べた。「モスクワという都は西欧東亞の人々が押しよ

せて変転きわまりないとはいえ、人を陥穽に落とし込む事件は年に多数ある。〔莫斯科之都。西欧東亜。賓客如雲。雖機械變詐。落人陷穽事。年以千万計〕（177頁）。正確ではないが大きく離れているというわけでもない。無歎羨齋主は喋血生よりも詳しい。佚名1は喋血生よりも自由に漢訳する。読者に呼び掛けて「読者のみなさんは知らなくてはならない。モスクワという都会は各地の人々が雑居しており地球万国の人でここに来て見聞を広めたいと思わない人はいない……〔看官須知莫斯科城裏五方雜處。地球万国的人。那一国不到這裏來拓眼界……〕」（3丁ウ）という具合だ。

事件の調査がはじまったが手がかりがない。行き詰ったあげく大探偵ミカエルが呼ばれた。

原作では単にミカエル・ダネヴィッチ Michael Danevitch と書かれている部分だ。蘆花は修飾語をつけて「露西亞第一の老探偵名はミカエル某」（94頁）と訳した。無歎羨齋主は「ロシアで最も有名な老練探偵ミカエル〔俄羅斯最有名老偵探美卡威〕」（112頁）と漢訳してそのままだ。ところが喋血生は「退職した老練探偵ミカエル〔帰田之老偵探米加野〕」（178頁）にする。蘆花の書いた「老探偵」から連想して「退職した〔帰田〕」と加筆したようだ。余計である。喋血生は「専制虎」においても同様に退役したと説明している。誤解を繰り返した。また佚名1も喋血生にならぬ「郷里に隠退しているロシアの有名な大探偵ミカエル〔告老帰田的俄国有名大包探梅嘉諧〕」、「彼はすでに郷里に隠退している〔他已經告老帰田〕」（3丁ウ）と同様に誤る。作品は現役時代のミカエルが解決した複数の事件について物語るものだ。それを隠退者にする必要がどこにあるのか。勘違いとしかいいようがない。間違いを共有するのが喋血生と佚名1である。

モスクワに来るように依頼したのはゴヴェミキン将軍 General Govemykin だ。蘆花は名前を示さず「莫斯科鎮台司令長官」と言い換えた。

原作にある将軍とミカエルの会話も省略している。日本語底本にないから漢訳にも存在しない。

ミカエルは大尉が変死した当日に食事をともにしたというアレクサンドルに面会することにした。

アレクサンドルが答えて大尉はオペラ（普通名詞でドラマと音楽が融合した総合舞台芸術）に行ったという。喋血生は「彼はオペラへ行って観劇すると言っていました〔彼曾云將往奧培刺観劇〕」（178頁）と二重傍線を使用する。オペラを地名だと誤解している。佚名1も喋血生にならぬ「彼はオペラへ行って観劇すると言っていました〔他説要到奧倍萊去看戲〕」（4丁オ）と誤る。

無歎羨齋主は「彼がオペラへ行くと言うのを聞きました〔聞他説要去阿卑拉〕」（114頁）だ。音訳して「阿卑拉」で間違いではない。こういう細かな個所に翻訳者の違いが露出する。

## 新展開

サンクトペテルブルクにジュリー（Julie／ジュリア／裘麗雅／焦利亜／裘麗華。注：原作／蘆花／喋血生／無歎羨齋主／佚名1の順）というフランス生まれの裕福な美女がいた。夫とは死別して40歳ばかりだが若く見える。宴会、舞踏会を開催して自由にふるまっている。求婚者が多くいたがすべて断った。多くの使用人のなかにロコという屈強なクリオール人（Creole／黒奴・ロコ／黒奴／黒奴／黒奴）がいて未亡人の警護をしいかなる命令にも従った。喋血生（179頁）だけが使用人は黒人ひとりだと書き換えている。佚名1（5丁オ）がそれに従う。

ミカエルが姿を消して新しい状況が展開する。そのように見せてはいるが実は繋がっているのが探偵小説だ。

未亡人の舞踏会に来集した人々のなかにポーランド人の伯爵がいた。原作ではプレベンスキー Prebenski という名前がある。蘆花は「伯蘭の伯爵」とするだけ。喋血生と無歎羨齋主は

それにならう。しかし佚名1だけが彼に名前をつけて戴倫である。佚名2は「伯爵某。自称波蘭貴族」だ。

伯爵は大量の酒をあおってそのまま寝てしまった。翌朝、伯爵は未亡人に詫げる会話の流れで金満家の独り身で淋しいと告白する。そうして伯爵は未亡人の屋敷に滞在することになった。

伯爵の滞在は2週間におよんだ。その間、未亡人は外出せず友人の訪問を断りひたすら伯爵を歓待した。伯爵を未亡人の舞踏会に紹介したトリポフが安否を確認しに訪問したが伯爵は出て行ったと追い返されてしまった。

【原作】 One caller, Peter Trepoff, who came specially to inquire about the Count, was told that though he had been there he had departed, without saying where he was going to. p.53

ピーター・トレポフという人が特別に伯爵のことを聞きに来たが、伯爵はそこにいたけれども、どこへ行くとも言わずに出て行ったと言われた。

【蘆花】夫人の知己にて伯爵を紹介したるトリポフも来りて伯爵の様子を聞けど、伯爵は当家に来られしも程なく何れへか去られたりと例の黒奴が賺かし遣りつ。 113頁

【喋血生】省略する 181頁

【無欲羨斎主】就是那夫人的知己紹介伯爵的特里輔。時打探伯爵的消息。這黒奴也出去回報他。不是説伯爵没有来。就是伯爵剛纔来過。坐了一会。已回去了。 18頁

夫人の知人で伯爵を紹介したトリポフが伯爵の様子を尋ねるとあの黒人が出てきて彼に答えた。伯爵は来ていないか、あるいは今しがた来られたがしばらく居られたあとすでに帰られた。

【佚名1】省略する 7丁ウ

【佚名2】雖杜里勃夫(夫人之友介紹伯爵亦係此人)亦被婉詞拒却。 1907.4.18 (九)

トリポフ(夫人の友人で伯爵を紹介したのはこの人物)もまた婉曲に拒まれた。

伯爵の知人トリポフが出てくるのが用意周到だ。この伏線は最後に回収される。伯爵は夫人の屋敷内にいるのだが、いないという返答は読者に疑いを起こさせるだろう。何かがおかしい。事件が隠されているのではないか。無欲羨斎主は底本どおりだ。佚名2も省略しながらほぼ漢訳している。それを喋血生と佚名1のように削除してしまつては疑惑が生じようもない。読者に考える余地を与えないから漢訳として不親切である。

伯爵が就寝している時、黒人が部屋に入り小瓶から無色の液を伯爵が愛飲している麦茶の入った容器にたらし込んだ [he drew from his pocket a phial containing a colourless liquid. p.53]。

【蘆花】黒奴はポケットより無色の液を盛りたる小瓶を取り出したり。 115頁

【無欲羨斎主】就在袋子裡頭。拿出一個小瓶。這小瓶裡頭。好像盛着清水。 19頁

ポケットの中から小瓶を取り出した。その小瓶のなかには澄んだ水が入っているようだった。

【佚名2】乃由懷中取出藥水。(中略)怪物取藥水注茶水中。 1907.4.22 (十)

懷の中から薬水を取り出した。(中略) 怪しいものは薬水を取り出して茶に注いだ。

黒人の行為がますます怪しい。寝たふりをしていた伯爵はその奇怪さにすでに気づいている。起き出して麦茶を別の容器に回収した。まさに探偵小説の重要点にさしかかっている。ところが喋血生と佚名1はここを別物に漢訳する。

【喋血生】一夜伯爵已寝。黒奴乃持沸湯為伯爵麦茶増足。持一小角燈頻頻照伯爵睡容。

次夜亦如之。伯爵愈感主僕之懇勲矣。 181  
頁

ある夜、伯爵がすでに眠っていると黒人がお湯をもって伯爵の麦茶につき足すと小ランプで伯爵の寝姿をしきりに照らした。次の夜も同じだ。伯爵は主人と使用人の気づかいにますます感激した。

【佚名1】有一天晚間。伯爵已經安息。黑奴提了沸湯。一手將茶壺裏泡滿。一手又拿一盞小角燈。細細看伯爵睡覺的樣子。第二夜也是如此。伯爵知道了。越感激的了不得。7  
丁ウ

ある晩、伯爵がすでに眠っていると黒人がお湯を持って茶瓶にたっぷり注ぐと小ランプで伯爵が寝ている様子をじっと眺めた。次の夜も同じだ。伯爵はそれを知ってますます大感激した。

喋血生は謀略が行なわれていることを隠蔽した。主人による親切なもてなしだと印象づけた。肝心の薬物投入を削除したのは探偵小説としてありえない。そこにいるのは何も知らない能天気な伯爵である。どうやら喋血生はそういう伯爵にしたかった。喋血生なりの説明をして結末をつけるのだが、どのみち蘆花日訳とは別物である。また佚名1は喋血生の文言をそのまま白話に書き直しているにすぎない。

ある朝、伯爵は食あたりしたらしく体調が悪いという。医者から投薬を受けた。この時点で賢明な読者は気づくだろう。夜中に黒人が麦茶に液体を投入したことと関係があるはずだ。伯爵はすでに怪しいことを察しているから体調不良というのは嘘ではないか。しかし喋血生が改変し佚名1が追隨した文章によれば伯爵は液体混入に気づいていない。正しく理解するのは無敵羨斎主と佚名2の漢訳を読む読者だけとなる。

午後になると伯爵は回復してネヴァ河畔に散歩に出かけるという。未亡人に同行を勧めたが一も二もなく断られた。そこでひとりで出て行

った。わざわざ未亡人の屋敷から出る必要が伯爵にはあったのだ。そこまでは露骨に原作も蘆花も書いてはいない。探偵小説だから読者が推測する部分だ。

伯爵が散歩にでかけたのを喋血生は観劇に行ったことに変えた。佚名1も同様。しかも帰ってきた伯爵が孤独の身を嘆いたことに対して未亡人が忠告する部分を加筆した。

【喋血生】閣下不聽見支那人有一句下流語乎。曰養兒防老。積穀防飢。閣下何不暫用之。安知卜枯楊之吉也。不料裘麗雅一句無心的話。竟遭只狼心狗肺的混蛋伯爵。動大妄念。 182頁

「閣下は支那人にひとつの俗諺があるのをお聞きではありませんか。子を養って老後に備え、穀物を積んで飢饉に備える。事前に準備をせよということです。閣下はどうしてそうなさらないのです。枯れた楊柳が若芽をふく（老人が若い妻を娶って子供を生ませる）という縁起のよい占いがあることをご存じないとでも」。ジュリアのこの何気ない言葉は、思いもかけず残忍非道な経験だけをしてきた愚かな伯爵に大いなる妄想を抱かせたのだった。

何を書き加えたかといえば簡単なことだ。未亡人は孤独な境遇を嘆く伯爵に秋波を送り結婚を匂わせた。それは彼女が今まで繰り返してきたことを背景にしている。原作にも蘆花にもない独特の変更である。喋血生は無知で気楽な伯爵という人物に設定したかった。前後の関連を考慮せずこの個所のみを見ればよく書かれているように思う。喋血生は作家の才能に恵まれている。佚名1もここで喋血生の文言を白話になおして記述する。

【佚名1】大君子不知道中国人有一句下流的俗語麼。說養兒防老。積穀防飢。大君子為

什麼不看看様。想一箇妥善的法子呢。果能得了一男半女。也不至於這樣寂寞了。看官須知麗華這兩句話。原は無意之中。好意相勸。誰知那意馬心猿的伯爵。就陡然起了一点狂妄的心腸。…… 8丁オ

「閣下は中国人にひとつの俗諺があるのをご存じではありませんか。子を養って老後に備え、穀物を積んで飢饉に備えるといひます。閣下はどうしてそうなさらないのです。すばらしい方法だと存じますがね。子供のひとりふたりを得ることでできればそのように寂しくはありません」。読者のみなさんご注意あれ。ジュリアの話はもとは無意識の言葉で好意で勧めただけだ。ところが心が乱れ思い悩む伯爵はにわか身程知らずの気持ちを起こしたのだった。

佚名1は喋血生の創作をそのまま取り入れた。蘆花日記とは関係がないのは明らかだ。

それにしてもフランス生まれロシア在住の未亡人に中国の俗諺を話させるのは型破りな着想だ。中国人でなければできない。しかしくろうまく書かれていようが原作と蘆花にないものだとくり返す。漢訳としては不適切である。

## 結 末

その夜も寝入った伯爵の部屋に黒人ロコがやってきて麦茶に液体を投入した。そうして結末になだれ込む。

伯爵は夜中の2時に起き出すと短銃を持って玄関へ行き8人の警官を屋敷に呼び入れた。伯爵が散歩に出かけた時に手配をすませていたことがわかる。未亡人の部屋へ行く。伯爵の変装を解いた大探偵ミカエルは寝ていた未亡人をゆり起こして拘引した。未亡人に伯爵を紹介したトリポフもミカエルの手下だと種明かしされる。未亡人は金持ちの男性をその美貌で誘惑し財産の所有権を手に入れると毒殺することを繰り返していた。

無欵羨齋主は蘆花日記を忠実に漢訳した。だが喋血生と佚名1は異なる。気楽で何も知らない伯爵像を堅持し続ける。ロコが麦茶に液体を投入した個所を削除したから事件の要素は消滅している。そのかわりに伯爵は未亡人に誘惑されたと思ったことに変更した。夜中に未亡人の寝室をひとりで訪問するのである。これでは恋愛小説だ。そのあげくにミカエルが正体を現わす。

【喋血生】心癢難搔。輾轉床褥。到了午夜鐘鳴。人声寂寂。躍起曰。冒險也只好冒了。乃直奔內室。見裘綺麗臥室。繡幃已下。雙扉深扃。原来使用開鎖的機關。可以旋轉的。伯爵將門輕開。見一燈暗淡。金猊尚微吐百合香。裘綺麗曲玉臂而枕。海棠春睡。十分媚妖。伯爵忽狂呼。愛卿!!!愛卿。而裘綺麗驚地驚覺。見伯爵跋扈。且怒且駭曰。君乃長者。妾未亡人。瓜李有嫌。何得夤夜而至此。妾與君同為旅人。俄國真無法律治罪耶。伯爵曰哦!!!哦。有法律治罪耶。果然。請貴君細看我面目來。噢!!!噢。伯爵將臉上一摔。面目也不黑了。髯鬚也沒有了。不料就是世界聞名的俄國大偵探米加野也。 182-183頁

(伯爵は)はやる心を抑えきれずベッドの布団の中で寝返りをうっていた。真夜中になり時計が鳴った。人声はなくひっそりしている。跳び起きて「危険をおかすならやるしかない」言った。そこで寝室にまっすぐ向かった。ジュリアの寝室は刺繍の幔幕がすでに下ろされて扉は固く閉じられている。使用されている鍵はもともと廻すことができる。伯爵が扉をそっと開けるとランプは薄暗く金の香炉はまだかすかにバラの香りを放っている。ジュリアが美しい腕を曲げて枕にしている様子は春に海棠が眠った(楊貴妃の酔った)ようでもとても妖艶だ。伯爵は突然「愛しい君、愛しい君よ」と大声で叫んだ。ジュリアはいきなりのこ

とで驚き目を覚ますと伯爵が勝手なことをしている。怒りと驚きで言った。「あなたは年長者で私は未亡人です。李下の冠、瓜田の履であらぬ疑いが生じます。どうしてこんな深夜にいらっしゃったのですか。私とあなたは旅住まいです。ロシアには処罰する法律は本当にないのですか」。伯爵は言った。「オ、オ。処罰する法律はありませんぞ。さて私の顔をよくご覧なさい」。ヤ!!!ヤ。伯爵が顔をつかんで引っぱると容貌も黒くはないしヒゲもなくなっている。なんと世界に名を知られたロシアの大探偵ミカエルだった。

愛の告白を実行したように見せかけて未亡人を逮捕したという筋書きだ。それ以前の薬物投入についても知らぬ顔をしていただけだと後でとまとめて説明する。

この個所だけをほかと切り離して取り上げれば文章としてよく書かれている。ただし中国風で塗り込められているのを感じるだろう。ロシアという単語は使用されてはいる。だが雰囲気はまるまる中国にほかならない。物語の舞台がロシアであることを忘れそうになる。喋血生は作家としての力量を有していることはわかる。蘆花日訳を利用して創作しているという理由だ。だが漢訳として判定すればやはり忠実度が低い。ため疑問符がつく。

上の喋血生を下敷きにして次の佚名1がある。白話で自由に書いているのを見てほしい。長くなるので途中は省略する。後半はミカエルが正体を現わす場面だ。

【佚名1】想来想去。那裏睡得著。回想日間麗華說的話。真是九轉迴腸。銘心刻骨。他既然落花有意。我怎的流水無情。這一夜在牀上。比那張君瑞在西廂。等待崔鶯鶯的情形。還要難捱十倍。翻來覆去。通夜無眠。直到寒鷄第一次齊鳴。那時万籟無聲。銅壺

静滴。忽地一礮碌跳下牀來。說道。如今冒險也只好冒了。并不拿什麼燈火。好在裘家房屋。早已認得爛熟。躡著脚步。輕輕慢慢的往內直走。……(中略)……/説也奇怪。伯爵話未説完。面目也不黑了。鬍子也沒有了。波蘭的伯爵。也不知到那裏去了。看官。你道怎的。原来這就是世界聞名俄国頭等大包探梅嘉諧的便是。8丁オウ、9丁オ

(伯爵は)いろいろ考えてどうにも眠りにつくことができない。昼間ジュリアの言葉を思い出してはらわたがひっくりかえるほどに焦って忘れられない。彼女にはその気持ちがあるのに私がどうして知らん顔ができるだろう。その夜中はベッドである張君瑞が西廂で崔鶯鶯を待つ(『西廂記』)状態よりも10倍も耐えがたく、輾転反側して夜通し眠ることができなかった。銀雉が最初に鳴く時刻になると辺りには音がなく時計が静かに時を刻んでいた。突然くると転がって飛び起きると「今危険をおかすならやるしかない」言った。ランプなど持たずともジュリアの屋敷はすでに熟知していたから抜き足差し足でひっそりゆっくりと奥に歩いて行った。……(中略)……/不思議なことに伯爵が話し終わるまえに顔も黒くはないしヒゲもなくなっている。ポーランドの伯爵はどこに行ったのか。読者のみなさんどう思われるか。なんとこれこそが世界に名の知られたロシアの大探偵ミカエルなのだった。

見ればわかる。佚名1が喋血生の漢訳にもとづき白話でもって書き直し詳細に描写し大幅加筆しているのだ。

#### 喋血生による特別な改変

喋血生は最後に特別におもしろい改作を施している。ミカエルが未亡人に事件の真相をすべて説明したあとだ。未亡人はミカエルに対して

強烈な反撃を加えた。

【喋血生】妾終非仏蘭西人。妾終与君同『画皮』手段者也。言畢剥去偽面。噫。一俄羅斯奇醜婦人耳。184頁

「私は決してフランス人ではありません。私はずっとあなたと同じ「仮面」を手段とする者なのです」と言い終わって仮面を剥いだ。おお、それはロシアのとて醜いひとりの婦人だった。

【佚名1】你算得什麼手段。你到底還不曉得我的真跡。我那裏是仏蘭西的人。我是和你一樣。生来的画皮手段。比你扮那波蘭人。還要強哩。說罷。也向臉上一掙。包探這驚同小可。睜眼一看。那裏是什麼絕大佳人。天仙美女。却是一箇俄国醜陋不堪的婦人。梅包探拍手大笑。伸了一箇大指。說仏立果。仏立果。佩服佩服。10丁ウ

「あなたがどのような手を使おうともあなたには私の本当のことは到底わからないのです。どうして私がフランス人でありましょうか。私はあなたと同じく生来の「仮面」を手段とする者です。あなたがポーランド人に扮していたのと比べてもより勝っています」と言い終わると顔をつかんで引っぱった。探偵は少なからず驚き目を見開いてみた。どこが絶大な美人、天女美女などであろうか。ロシアの醜悪きわまりないひとりの婦人であった。ミカエル探偵は手を打ち大笑いし親指を立てて言った。「ベリーゲー。お見事。感心感心」

喋血生は大探偵ミカエルですら驚くほどの結末に作り直した。「画皮」は人間の皮をかぶって美女に化け男を餌食にする妖魔のこと（『聊齋志異』）。本稿では「仮面」と訳して「変装」と同じ。あの大探偵がひとりの女性に騙されたのだ。変装で似た例は「専制虎」の井ルソン夫人にも使用されていた。だがこちらは蘆花とは

異なり逆転劇になっている。物語の結末にまったく別の種明かしとして出てくるとは「意表の外」である。清末の読者ならば抵抗感なく受け入れたらう。しかし蘆花日訳を知っているとあまりの奇抜さに腰を抜かしそうになる。双方を読む人はいないにしてもだ。

佚名1は喋血生の該当部分に加筆して大探偵を大笑いさせてもうほとんど喜劇にした。佚名1「俄国包探案」は『繡像小説』に掲載。該誌は上海で刊行されていた。そこから佚名1が上海に居住しており外国人が話す英語の Very good を耳にしていたと推測できる。「仏立果 [ベリーゲー]」と音訳して大探偵ミカエルに喋らせた。

喋血生による最後部分の改変は規模は小さいにしても想像を超えている。中国で知られた妖魔を蘆花日訳に挿入する力量はたいしたもの。すこしの違和感もない。すでに翻訳の枠を突破した創作であるといつていい。これほどまでに斬新な終幕は原作者ドノヴァンでも思いつかないのではないか。翻訳から出発していろいろ改変したあげく底本に縛られることなく自由に作文している事実を見せつけている。ここまで独創的なものを示されると読者としては感心するあまり膝を打ち自然に笑みが湧きあがってくる。

## 結 論

蘆花訳「毒薬」を底本にした漢訳の忠実度でいえば無敵羨斎主が抜きんでている。佚名2もほぼ同等といつていい。

喋血生のものは自由に省略、加筆、改変した翻案だ。漢訳題名の「攝魂花」は未亡人の手管を象徴しており秀逸である。ただしその基本姿勢は底本を材料にして自分なりの創作することだ。「攝魂花」の創作内容が独特である点には注目してもいい。作家としての才能に恵まれていることが理解できる。しかし漢訳としての評価は別になる。

佚名1は文中に中国を例に引いて比較する個

所を盛り込む傾向がある。しかも喋血生の漢訳にしか見られない個所を引き写している。既述のとおり渡辺浩司が「直接訳ではないが同内容」と説明した。いうまでもなく蘆花「毒薬」を底本にしていないということだ。すなわち佚名1は蘆花を翻訳したものではない。喋血生の文言漢訳にもとづいて白話で書き直したのである。

「攝魂花」という題名を使用しなかったのにも理由があるだろう。文言と白話は異なるという意識があった。また多くの加筆をしているから喋血生漢訳とは違うと考えたのではないか。ロシアの大探偵ミカエルが主人公だからそれをそのまま漢訳して「俄国包探案」である。喋血

生漢訳に直接結びつけられることを避けたかったようだ。

佚名1について加筆は何かの補償心理だと書いた。文言を逐語的に白話へ改変するだけでは付加価値がない。だから独自に加筆の傾向を強めたとわかる。

喋血生を変形したものが佚名1である。あくまでも漢訳の忠実度を基準にして評価すれば、という前提になる。無歆羨齋主(≒佚名2)の方が喋血生(≒佚名1)よりも優れているという結論である。 ㊦

毒薬固有名詞対照表

DICK DONOVAN	蘆花	喋血生	無歆羨齋主	佚名1	佚名2
×	穴栗	我	蕭	×	
Colonel Ignatof	イグナトフ大佐	伊科納杜	伊格拿輔	伊坤凶	葉提督
Moscow	莫斯科	莫斯科	莫斯科	莫斯科	莫斯科
Peter Baranoff	バラノツフ大尉	勃蘭芝傅	巴拉奴輔	伯蘭	巴拉塞夫
the Moscow Gazette	莫斯科ガゼット新聞	卡塞篤新聞社	莫斯科「嘉直」新聞	卡塞篤報館	
black hellebore	黒色ヘレボール	海婁濮兒	黒色「耶列波爾」	海留ト兒	
Christmas rose	基督降誕節薔薇	基督降誕節薔薇	基督降生薔薇	基督薔薇花	
Alexander Vlassovsky	アレキサンドル	亞歷山德	亞歷山大	夏歷山	亞歷山
Michael Danevitch	ミカエル	米加野	美卡威	梅嘉諧	密奎洛
General Govemykin	莫斯科鎮台司令長官	莫斯科鎮台司令長官	砲台的將官	莫斯科鎮台掌令官	軍隊提督
Julie St. Joseph	ジュリア	裘麗雅	焦利亞	裘麗華	呂夫人
Roko	黒奴/ロコ	黒奴	黒奴	黒奴	黒奴/羅哥/哥洛
Prebenski	伯蘭の伯爵	伯蘭的伯爵	伯蘭的伯爵	戴倫	伯爵某
Peter Trepoff	トリポフ	×	特里輔	×	杜里勃夫
the Neva	子ヴァ河畔	×	涅威尼河	×	涅巴河畔
Siberia	西比利亞	西伯利亞		西伯利亞	×

【注】

1) 徐兆璋著、蘇醒整理『徐兆璋雜著七種』南京・鳳

凰出版伝媒股份有限公司、鳳凰出版社2014.3 中国近現代稀見史料叢刊 第1輯

## 抱一庵「少年使者」と 喋血生「少年軍(二)」

荒井由美

### はじめに

喋血生の「少年軍」は翻訳とは示さないが3種類の底本を使用した連作漢訳である。本稿ではその中の「二」のみを取り上げる。その理由は初出と転載のふたつがあるからだ。

初出は『浙江潮』第7期(目次は癸卯七月二十日(1903.9.11)、奥付は癸卯陰曆七月初十日(1903.9.1) / 明治三十六年十月十一日。影印本)だ。それが転載されて社員(目次は社員旧著)「(軍事小説)少年軍(短篇)」(『月月小説』第1年第9号 光緒三十三年九月初一日(1907.10.7)。影印本)である。また『萃新報』第2期(1904.7.1)にも掲載されたという([梁王136])。こちらは未見。

喋血生「少年軍(二)」の底本が原抱一庵訳「少年使者」(『(伊国美談)十二健児』内外出版協会1902.5.28)であることは[梁艶16][梁王136]の指摘による(中村忠行、渡辺浩司、李艶麗ほかの研究および略号は樽目録の注釈を参照されたい)。

また『月月小説』の転載について[梁艶16]は「軍事小説」, 対《浙江潮》刊《少年軍(二)》在字句上稍作改動, 此處可知“社員”即“喋血生”(289頁)と説明する。また[梁王136]にも「社員”即喋血生」と書く。

以上の先行研究を参照した。

少し補足する。原抱一庵の翻訳は次のとおり。伊国エドモンド、デ、アミチス原著、抱一庵主人重訳『(伊国美談)十二健児』(内外出版協会1902.5.28。奥付は著作者:原余三郎。国立国会図書館デジタルコレクション所収)

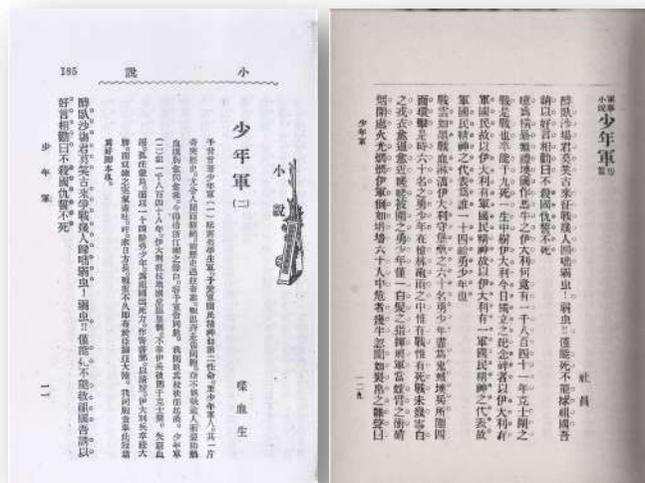
抱一庵が底本について次のとおり書いている。「一 本書は伊太利人エドモンド、デ、アミチス氏著『伊国学童日誌』(第三十九版)中九章十一節を英訳に據りて翻訳せるものなり」

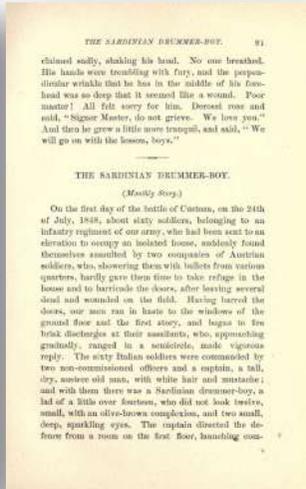
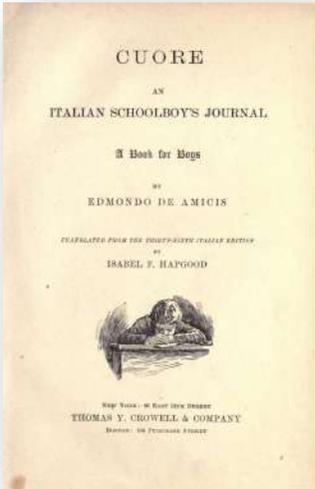
それを手がかりに調べると英語版がわかる。

エドモンド・デ・アミーチス『クオーレ』イタリア語第39版にもとづきイザベル・フローレンス・ハプグッドが英訳した。EDMONDO DE AMICIS “CUORE AN ITALIAN SCHOOLBOY'S JOURNAL” TRANSLATED FROM THE THIRTY-NINTH ITALIAN EDITION BY ISABEL F. HAPGOOD. NEW YORK: THOMAS Y. CROWELL & COMPANY, 1887 AND 1895 である(open library 所収)。抱一庵の「其四 少年使者」は「サルデーニヤの少年鼓手 [THE SARDINIAN DRUMMER-BOY]」を底本とする。陳宏淑([宏淑14])が包天笑漢訳に関連してイザベル英訳版を出している。それと同版だ。

以上が準備段階である。

本稿の目的のひとつは転載した際に喋血生が固有名詞表記を変更したか否かを検討するとこ





ろにある。最後に述べる。

その前に喋血生漢訳を簡単に見ておく。

### 喋血生漢訳の検討

まずアミーチス原作を抱一庵がどのように日訳したか。冒頭部分を少し長く引用する(ルビ省略)。

【原作】 On the first day of the battle of Custozza, on the 24th of July, 1848, about sixty soldiers, belonging to an infantry regiment of our army, who had been sent to an elevation to occupy an isolated house, suddenly found themselves assaulted by two companies of Austrian soldiers, who, showering them with bullets from various quarters, hardly gave them time to take refuge in the house and to barricade the doors, after leaving several dead and wounded on the field. Having barred the doors, our men ran in haste to the windows of the ground floor and the first story, and began to fire brisk discharges at their assailants, who, approaching gradually, ranged in a semicircle, made vigorous reply. The sixty Italian soldiers were commanded by two non-commissioned officers and a captain, a tall, dry, austere old man, with

white hair and mustache; and with them there was a Sardinian drummer-boy, a lad of a little over fourteen, who did not look twelve, small, with an olive-brown complexion, and two small, deep, sparkling eyes. p.91

クストーザの戦いの初日、1848年7月24日、高台の一軒家を占拠するために派遣されたわが軍の歩兵連隊所属の兵士約60名は突然オーストリア兵の2個中隊に襲われた。彼らはさまざまな方角から銃弾を浴びせてきたから野に数人の死傷者を置いたまま家の中に避難して扉を塞ぐ暇もないほどだった。扉を塞いだ後、兵士たちは急いで1階と2階の窓に駆け寄り半円を描くように徐々に近づいてくる敵に勢いよく砲撃し始めた。60人のイタリア兵は、ふたりの下士官と、白い髪と口髭のある背の高い飾らない厳格な老人の隊長によって指揮されていた。そうして彼らと一緒にサルデーニャ人の太鼓叩きがいた。14歳を少し過ぎた若者だったが12歳には見えないとはいえ小柄でこげ茶色の顔色の小さくて深くきらめくふたつの目をしていて。

【抱一庵】 一千八百四十八年七月二十四日、カストザの戦の第一日、小丘の上に立てる空屋占領の任務を帯びて進行せる吾歩兵連隊所属の六十個の兵士は、突然奥国兵の襲撃に会へり／(註。一千八百四十八年はサルヂニア王ヴィクトル、エムマニユエルが數ば奥国に抗して其名声を博し、伊太利のチャンピオンたるの称を得たる時代なり)／四圍より発し来る敵の弾丸は、死者、負傷者を野に打棄てたるまゝ遽て空屋に逃げ込み楯籠るを与儀なくされしほど爾く急劇突如なりき／戸口戸口を緊く閉ぢたる後ち、吾同胞は土間及び初層の室の窓より襲来の敵に対つて一斉射撃を始めぬ、敵は半円形を作りつゝ徐々として迫り来り、強硬

に対抗せり、六十個の吾伊太利兵は数名の隊外将校及び白髪、白髯、丈高く面厳かなる一老佐官に指揮せられぬ、渠等と俱に一個のサルヂニア少鼓手（スモールドラムマー）あり、黒き面と輝やく双眸とを有てるが、小身材にして打見には十一二なれども、実際は今爰（ことし）十四歳なり 43-44頁

抱一庵の翻訳は注釈を加えた部分を除き原作に忠実だ。

つぎに喋血生漢訳を見る。まず解説文をつけているのが抱一庵と異なる。ほかの「少年軍」2篇にも同様に解説文を書いている。喋血生の考え方を手掛かりがある。引用する。

【喋血生】予昔曾著少年軍（一）記南美学学生軍。予愛軍国民精神如第二性命。至少年軍人。其一片奇突歴史。尤令人聞而駭絶。読歴史遇茲奇案。輒思奔走告同胞。奈不能執途人而盡語熱血填胸愈閃愈沸。今得借浙江潮之余白。容予宣告同胞。我同胞其投袂而起哉。少年軍（二）記一千八百四十八年。伊大利抵抗奥国虎狼压制。不幸伊兵被圍于克士蘭。失窮血竭。孤注盡負。而以一十四齡勇少年。為祖国出死力。作寄書郵。以請援。伊大利兵卒獲大勝。而奴隸之冤氣盡吐。吁。來日方長。戰雲不久即布於亜細亞大陸。我同胞蓋此短篇為好脚本也。

私はかつて「少年軍（一）」を書いて南部アメリカ学生軍のことを述べた。私は軍国民精神を第二の命のように愛している。少年軍人についてはその特異な歴史が人をとても驚かせる。歴史を読んでこの奇怪な事件に遭遇したので急いで同胞に告げようと思う。実行ができる者ではないが言葉をつくせば熱血が胸に満ちますます輝き沸き立つのだ。今『浙江潮』の余白を借りて同胞に告げることを許されよ。我が同胞よ奮起してくれ。「少年軍（二）」は1848年、

イタリアがオーストリアの暴虐压制に抵抗したことを述べる。不幸なことにイタリア兵はカストザにおいて包囲された。矢は尽き血は涸れすべてを賭けてことごとく負けた。しかし14歳の勇敢な少年が祖国のために死力をつくし救援を求める通信文を運んだ。それによりイタリア兵は大勝を獲得し奴隸の無念を一掃した。ああ、先は長く戦雲がもうすぐアジア大陸を覆うだろう。我が同胞よ、この短篇はよい脚本となるのだ。

解説文にある「少年軍（一）」とは喋血生「（軍事小説）少年軍」（『浙江潮』第1期光緒二十九年正月二十日（1903.2.17））を指す。底本は徳富健次郎（蘆花）纂輯「少年軍（南北戦争の花）」（『（近世欧米）歴史之片影』民友社1893.7.9）である。軍国民精神を称賛する作品を集めて統一題名は蘆花の「少年軍」を使用した。

イタリアの少年兵が勇敢に行動してオーストリア兵との戦いを勝利に導いた。内容を要約して読者の理解を助ける考えだ。短篇小説だから必要なさそうだが喋血生は書きたかった。

注目するのはこの漢訳を喋血生自身が「著」と記していることだ。普通「著」と「訳」は区別する。だが喋血生にとっては「著」なのだった。解説の内容を含めて漢訳者の自由になる個所だ。

では本文はどうか。

【喋血生】酔臥沙場君莫笑。古來争[征]戰幾人回。咄弱虫！弱虫!!僅能死。不能救祖国。吾請以好言相勸曰。不殺国仇誓不死。／噫。作牛馬之伊大利。何竟有一千八百四十八年。七月二十四日。克士蘭之戰卒能于九死一生中樹伊大利今日獨立之紀念碑于小丘上。是惟伊大利有軍国民精神故。是惟伊大利有一軍国民精神代表之十四齡勇少年故。 185-186頁

「酔って戦場に寝てしまっても君よ笑ってくれるな、古来いくさに出て行って幾人が生還したというのだろうか」(王翰「涼州詞」)。おお、弱虫!弱虫め!!死ぬだけで祖国を救うことはできないのか。私がいい言葉をお勧めする。「国の仇を殺さずには誓って死にはしない」/ああ、凶悪獰猛で野蛮無礼なオーストリアに牛馬とされたイタリアはなぜ1848年7月24日になってカストザの戦いにおいて九死に一生を得てイタリアの今日独立の記念碑を小さな丘の上に立てることができたのか。それはただイタリアに軍国民精神があったからである。それはただイタリアに軍国民精神を持った代表として14歳の勇敢な少年がいたからである。

王翰の詩は故郷を離れた地で戦い死ぬことの悲しみを表わしている。だが喋血生はそれを「弱虫」と罵るのだ。あくまでも国の仇を討てと軍国民精神を鼓舞する。それに14歳の勇敢な少年を結びつける。

「1848年7月24日」「カストザ」「小丘」「14歳」と単語は共通する。しかし表現が抱一庵日訳とはまったく異なることがわかるだろう。

原作とは異なるのはほかにもある。14歳の少鼓手に援軍要請の通信文を持たせて派遣した。そのかいあって一時は挽回するものの結局は負けて退却した。事実カストザの戦いに勝利したわけではないのだった。独立の記念碑を丘に建てたのは底本とは無関係で喋血生が誇張した創作だ。

作ったといえは援軍要請の通信文にまつわる1件もそうだ。もとは隊長(captain/佐官/将軍。注:英訳/蘆花/喋血生の順)が通信文を書いて少鼓手に持たせて走らせる。ところが喋血生は少鼓手の方から将軍に援軍要請の手紙を書くように要求している。部下、それも少鼓手が上官に命令を要求するのは指揮系統を無視

しているといわざるを得ない。

それらの改作はすべて少鼓手を勇敢で命を懸けて同胞を救う英雄に仕立てあげるためだ。喋血生は自分の考える英雄少年兵を提示するために底本の筋と表現を平気で改変した。雑誌『浙江潮』ではそういう傾向が好まれたらしい。自樹(魯迅)「斯巴達之魂」も同じ『浙江潮』第5-9期(1903)に掲載されている。

違うといえば「十四歳勇少年」だ。どこにも「サルゲニア少鼓手(スモールドラムマー)」の記述がない。

伝令の役目を終えた少鼓手と隊長が教会に設けられた野戦病院で対面する。隊長は少鼓手が出血しているのを見た。喋血生はその場面も書き換えた。

【原作】“Must have lost a great deal of blood!” replied the boy, with a smile.

“Something else besides blood: look here.” And with one movement he drew aside the coverlet. / The captain started back a pace in horror. / The lad had but one leg. His left leg had been amputated above the knee; the stump was swathed in blood-stained cloths. p.99

「大量に出血したんでしょうね」と少年は微笑みながら答えた。「血のほかは何かを失いました。ここを見てください」。そして一挙に上掛けを脇に寄せた。/隊長は恐ろしくて一歩後ずさりした。/少年は片足しかなかった。左足は膝から切断されており残りは血に染まった布で包まれていた。

【抱一庵】少年は微笑しつゝ「失血も多からん、否、否、血の外に余は或ものを失へり」/曰ひつゝ渠は被ひものを刎ね除けぬ/恐怖の餘り老佐官は一歩後退れり/少年は唯片脚を有するのみなりし、一足は膝より切り去られぬ 63頁

抱一庵はこの部分をほぼ過不足なく日本語に写している。ただし原作ではその後に軍医の解説がある。すなわち少年が(通信文を届けるために)死に物狂いに力を使い果たしたから片足を切断しなければならなくなると説明している。少年の任務を完遂するという強い意思が自身の片足を失う原因となった。この追加説明は感動する場面には不必要だと抱一庵は判断したらしく翻訳していない。

喋血生は該当する箇所をもっと強烈に印象付けるために改変した。隊長が少年を見て出血しているのかという問いかけに答えた場面だ。

【喋血生】少年微笑曰。失血非也。血之外予或有所失。忽将覆被一揭。將軍一驚一退後。咄咄!!!少年僅有半個。而下体已切断。  
190-191頁

少年は微笑んで言った。「失血というのではありません。血の外に私には失ったものがあるのです」と突然に上掛けをはぎ取った。將軍は驚き後ずさった。おお!少年はわずかに半分があるだけで下半身が切断されていたのだ。(注: 転載した時「失血」を削除し「非也」だけを残した)

失ったのが片足から下半身に拡大している。誇張のし過ぎだ。抱一庵日訳から離れた。

喋血生は最初から抱一庵日訳をそのまま翻訳する気はなかった。自分の主張を明確に表現するために日本語翻訳を材料にして自由に作文しているからだ。

喋血生の翻訳についての考え方が一般とは異なる。底本どおりに漢訳するのではない。底本はあくまでも創作するための素材にすぎないと思っているようだ。底本作品に触発されたかのように部分的には生かしつつ、必要ならば創作して喋血生独自の作品に仕立てる。「訳」ではなく「著」とする理由だ。

清末民初時期において翻訳と明示しない作品

は多い。創作かと思えば翻訳だったという例は普通にある。包天笑、陳景韓も翻訳と明記しないばあいもあった。喋血生もその中のひとりのようだ。ただし天笑、景韓に比較して翻訳数が圧倒的に少ない。「訳」を明示することが多くないことに気づく。

## 初出と転載

最後に喋血生漢訳の初出と転載について述べる。

転載に際し題名「少年軍(二)」を「(軍事小説)少年軍(短篇)」とした。角書などを加えただけで「少年軍」は同一だ。喋血生を「社員」と変更。解説文を省略した。

字句に細かな修正がある。「為凶狠横暴。野蠻無礼壞国」と「×」をつけた漢字を削除する。1例にすぎない。あるいは「一千八百四十八年。七月二十日」と月日を省略した。

全ページにわたって細かく手を入れている。前後の入れ替え、語句の書き換えが少しある。だが主としては語句の省略である。文章を圧縮する方向で改変した。加筆はないといっている。

固有名詞についても初出と転載の文章に変更は見られない。同一作者の同一作品だからそれが当然だ。転載するに当たり固有名詞を書き換える必要があるとは思えない。

固有名詞を書き換えたかどうか。これが喋血生と陳景韓について考えるときの材料のひとつになる。 罫

原作	抱一庵	喋血生初出	喋血生転載
Custoza	カストザ	克士閣	克士閣
Sardinian	サルデニア	×	×
Villafranca	ビルラフランカ	碧浪村	碧浪村
Mincio	ミンシオ	敏泌	敏泌

【参考文献】E・デ・アミーチス、和田忠彦訳『クオーレ』新潮文庫1999.3.1

抱一庵『ABC組合』と  
喋血生「少年軍(三)」

神田 一三

はじめに

抱一庵主人訳『ABC組合』については梁艷(2010)\*1の言及がある(渡辺浩司、寶新光、梁艷+王玉らの研究は樽目録の注釈を参照のこと)。

抱一庵の該訳は雑誌連載後に単行本になった。初出は原作者不記、抱一庵主人訳「ABC組合」(『少年園』第145-156号 1894.11.3-1895.4.18)だ。単行本はヴェクトル、ユーゴー原著、抱一庵主人訳述『ABC組合』全15回(奥付は原余三郎。内外出版協会1902.2.3。両者ともに国会図書館所蔵)である。

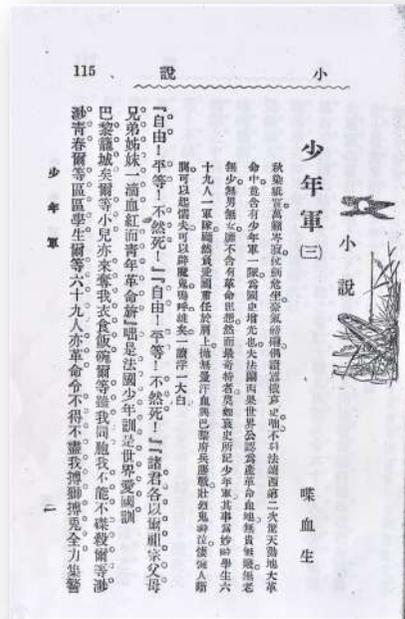
梁艷はさらに抱一庵訳「ジヤンバルジアン」の英語底本を特定した。VICTOR HUGO 原作、CHARLES E. WILBOUR 英訳“LES MISÉRABLES” NEW YORK: A. L. BURT, PUBLISHER, JUNE 1862(注:本稿で使用するのはNEW YORK: CARLETON, PUBLISHER, 1862. hathi trust 所収)。そこから『ABC組合』もウィルバーの同一英訳本を使用したと推測できる。

抱一庵単行本には「例言」がある。「本書はヴェクトルユーゴー著『哀史』中「ABC組合(THE FRIENDS OF THE ABC)」に關聯する篇章を採抜訳述せるものなり」(ルビ省略)と説明する。英語表記だから底本としたのが英

訳本だとわかるだけ。また「關聯する篇章を採抜」という記述は抱一庵が使用した文章を探す際の手がかりになる。

「ABC組合」は抱一庵の訳語だ。別訳では「ABCの友」ともいう\*2。「ABC」は「卑しめられた人たち」を意味する。本篇の主人公たちはそれを引き上げようとしていた「友」だ。弱者の味方をする革命青年集団である。抱一庵自身が該書において説明して次のとおり。「ABC組合とは何ぞや、表面は児童教育を標榜せる一合体なりき、然れども実は成人啓蒙を以て任とせり」(33-34頁)。「青年思想家の団体たる当組合」(59頁)

以上の研究にもとづいて喋血生「少年軍(三)」(『浙江潮』第9期癸卯九月二十日(1903.11.8。ただし影印本奥付は陽曆十一月二十八日發行)。未完)を取りあげる。



その漢訳内容を検討するのが本稿の目的だ。

抱一庵と喋血生の該当箇所

抱一庵日訳の単行本には初出雑誌連載には見えない文章が収録されている。喋血生漢訳に關する部分を以下に示す(○:該当する。×:なし)。

『少年園』	『ABC組合』	『少年軍(三)』
第145号 『紅色旗』上	第1回 『紅色旗』	○
第148号 『紅色旗』下	〃	○
×	第2回 一千八百三十二年! (上)	○
×	第3回 一千八百三十二年! (中)	○
×	第4回 一千八百三十二年! (下)	×
第149号 『組合員』甲	第5回 組合員(上)	×

(以下略)

雑誌『少年園』に掲載されなかったものが後の単行本『ABC組合』第2-4回に収録されている。そこから喋血生は抱一庵の雑誌ではなく単行本第1-3回にもとづいて漢訳したとわかる。従来からの指摘どおりだ。

また喋血生漢訳は『浙江潮』第9期から第11・12期合刊まで掲載していると書く目録、文章がある。たとえば上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』2(1900-03年分 上海人民出版社1979.10)に第11・12期合刊(刊年不記)の目次を収録する(〔彙②794-795〕)。そこには注がついている。「并據廣告編録第11-12期合刊目録」。雑誌の実物ではなく広告にもとづいたという。刊行を予告したが実現しなかったとわかる。

喋血生「少年軍(三)」の漢訳原稿について考えるばあいこの刊行予告広告がひとつの材料になる。「少年軍(三)続」と表示される。あきらかに『浙江潮』第9期に続くものだ。第10期は未掲載で第11・12期合刊に登載が予告された。広告に見えるということはすでにその分の喋血生漢訳はできていたと推測することが可能だ。ただし訳文全部が完成していたという証拠はない。事実として『浙江潮』は第10期までしか確認できていない。くり返すがその第10期に喋血生「少年軍(三)」の続きは掲載されていないのが重要である(後述)。というわけで喋血生漢訳は仮に未発表部分があるにしても第9期掲載「未完」のまま中断したという結論になる。

抱一庵の雑誌『少年園』連載開始には「前言」ともいべき解説文が書かれている。物語の全体を要約しているから引用する(ルビ省略、下線は筆者)。

【少年園】兎も角も妙齡学生六十九人の一隊を以て、不敵にも国家の安危渠等の肩上に懸ると為し、平常通ひつけの居酒屋を毀ちて堡壘を築き、巴里城内千百の兵士を相手とし戦ふ、何ぞそれ壮なる乎。／事は仏蘭西大革命の前後に起り、筆は仏国の大文豪ユゴー先生に成る。／以往閑に任せて訳出し、以て『少年園』に寄す。第145号18頁

上の文章は単行本収録にあたり削除された(抱一庵は一貫して「ユゴー」と表記するから上記はママとした)。ところが漢訳者の喋血生は雑誌に掲載された上文の一部(下線部分)を自分の「前言」に使用している。

【喋血生】秋染紙窗。万籟岑寂。仗劍危坐。豪氣磅礴。偶讀叢俄哀史。咄。不料法蘭西第二次驚天動地大革命中。竟含有少年軍一隊。為國史增光也。夫法蘭西果世界公認為產革命血地。無貴無賤。無老無少。無男無女。靡不含有革命思想。然而最奇特者。莫如哀史所記少年軍。其事為妙齡学生六十九人一軍隊。驕然負愛國重任於肩上。拋無量汗血与巴黎府兵鏖戰。壯烈鬼神泣。悽惋人

断腸。可以起懦夫。可以辟魔鬼。嗚呼。雄矣。一読浮一大白。 115頁

秋が紙の窓を染めて静まりかえっている。剣を手に正座して雄々しい気概がみなぎっている。ふとユーゴーの『哀史』を読む。ああ、なんと驚天動地のフランス第2次大革命には少年軍の一隊が含まれており国史の誉れを高めたのだ。フランスは革命を生み出した血ぬられた地であると世界が認めている。貴賤の区別なく、老少の区別なく、男女の区別がない。革命思想を含まないものはないのだ。しかし最も奇特なのは『哀史』が述べる少年軍より勝るものはない。それは妙齡学生六十九人の一隊が軽やかに愛国の重任を肩に担い無限の汗血を注いでパリの兵隊と苦闘したことだ。壮烈さに鬼神は泣き、悲痛さにはらわたが千切れる。意気地なしを立ち上がらせることができ、悪魔を避けることができる。ああ、雄々しいことだ。読んで大杯で酒を飲もうではないか。

下線部の語句がほぼ一致しているから偶然ではない。喋血生が抱一庵の初出雑誌を見ていたと考えていいだろう。

「ふとユーゴーの『哀史』を読む〔偶読露俄哀史〕」とある。この『哀史』は抱一庵『ABC組合』を指しているにすぎない。また喋血生は「少年軍」と称しているがABCの人は革命青年集団だ。漢語の「少年」は年齢の幅が広いから間違いではない。「ABC組合」のことを「仏蘭西少年革命軍」(118頁)と漢訳していることも記しておく。

上の「前言」はなにか壮絶な物語が展開される印象を与えている。革命思想の説明を少し滑り込ませて本文の予告である。

抱一庵日記は1832年6月5日にABCの友が官兵によって殺害されたことを述べる。反乱勢力が壊滅した文字どおり壮絶な結末だ。しか

し漢訳の発表は未完に終わった。「前言」のとおりに物語が展開したかどうかについて清末の読者は知ることができない。

喋血生は「少年軍(一)」でアメリカ南軍の少年軍を、その「二」でイタリアの少年兵を賛美した。では続くこの「三」でフランスの少年軍(実質は革命青年集団)をどのように描写するのか。全訳ではないから検討は部分的にならざるをえない。それでも興味深い。

### ユーゴーの英訳と抱一庵日記

喋血生が漢訳した抱一庵訳は第1回「紅色旗」と第2・3回「一千八百三十二年」だ。

それぞれに該当する英訳箇所は第4部「ブルメ街の牧歌とサン・ドニ街の叙事詩〔THE IDYLL IN THE RUE PLUMET AND THE EPIC IN THE RUE ST. DENIS〕」にある。

第1回「紅色旗」——第14章「絶望の壮かさ〔THE GRANDEURS OF DESPAIR〕」。第1節「旗 第1幕〔THE FLAG: FIRST ACT〕」および「旗 第2幕〔THE FLAG: SECOND ACT〕」。

第2回「一千八百三十二年(上)」——英訳不明

第3回「一千八百三十二年(中)」——第1章「歴史の数ページ〔A FEW PAGES OF HISTORY〕」。第4節「土台に入った割れ目〔CRAVICES UNDER THE FOUNDATION〕」

抱一庵の書名は『ABC組合』だが英訳の1ヵ所だけを取り出したわけではない。注意が必要な点だ。すなわち英訳ユーゴー第3部「マリユス」第4章「ABCの友」を翻訳したと勘違いしそうになる。そうではない。同様に「一千八百三十二年」といいながら英訳第4部の第10章「1832年6月5日」をそのまま使用してはいないのだ。彼が「関聯する篇章を採抜」といったのには意味がある。上述のように複数の場面

から採取してつなぎ合わせた。その隙間は抱一庵が補ったと推測できる。抄訳というより翻案だ。

どれくらい英訳と離れているか。冒頭を引用する(ルビ省略。以下同じ)。

【英訳】NOTHING came yet. The clock of Saint Merry had struck ten. Enjorlas and Combeferre ha sat down, carbine in hand, near the opening of the great barricade. p.166左

まだ何もおこっていない。サン・メリーの時計は10時を鳴らした。アンジョルラスとコンプフェールは大きい方の堡塁の開口部近くにカービン銃を手にして腰を下ろしていた。

【抱一庵】警視隊、憲兵隊、各旅団——凡そ巴里城内有ゆる武夫の一半は、ABC組合の青年学生六十九人の楯籠れるコリンズ堡塁の周囲を十重二十重に取囲り。1頁

見てのとおり抱一庵による要約だ。英訳にそのままあるわけではない。コラント(CORINTHE/コリンズ。注:ウィルバー英訳/抱一庵の順)とはレストラン兼酒場である。堡塁(バリエード)を築いてABCの友43名(forty-three p.166右。首領アンジョルラス(Enjorlas/インジョルラス)、先導者コンプフェール(Combeferre/コムバーハー)らを含めた100名を超える人々が立てこもっている。中核となるABCの友の学生は43名だ。抱一庵はそれを69名に増やした(別の個所では「組合員九十二人」122頁)。抱一庵は英訳にもとづきながら取捨選択のうえ大筋を翻訳している。直訳ではない。改作しているからくり返すが翻案作品である。

#### 喋血生漢訳1——抱一庵第1回「紅色旗」

喋血生は抱一庵の冒頭個所をどのように漢訳

したか(抱一庵の訳語を使用する)。これがまったく異なるからいかにも喋血生らしい。

【喋血生】『自由!平等!不然死!』『自由!平等!不然死!』『諸君各以爾祖宗父母兄弟姊妹一滴血。紅而青年革命旗』咄。是法国少年訓。是世界愛國訓。115頁

「自由!平等!然らずんば死!」「自由!平等!然らずんば死!」「諸君はそれぞれが先祖父母兄弟姊妹の一滴の血でもって青年革命旗を赤く染めよ」。ああ、これがフランス少年の教えである。これが世界愛國の教えである。

いきなり「自由!平等!然らずんば死!」だ。これは抱一庵の日訳(8頁)をそのまま翻訳して冒頭に使用した。もとの英訳は‘*Vivé la révolution! vive la république! fraternity! equality! and death!* [革命万歳! 共和万歳! 友愛、平等、そして死!]’(p.168左)である。「自由[freedom]」と「友愛[fraternity]」は違う。抱一庵は底本どおりに訳してはいない。喋血生も抱一庵を受け入れながら自由に作文した。

作家の才能に恵まれた喋血生はそれだけでは終わらない。抱一庵の記述を拾いさらに書き加える。警視隊などがコリンズ堡塁の周囲を十重二十重に取り囲んだというその前部に追加した説明がそれに相当する。

【喋血生】巴黎籠城矣。爾等小兒。亦來奪我衣食飯碗。爾等雖我同胞。我不能不磔殺。爾等渺渺青春。爾等区区學生。爾等六十九人亦革命。令不得不盡我搏獅搏兔全力。集警視隊。憲兵隊。各旅團。以十重廿重。圍爾等革命仇人於堡壘中。115-116頁

バリ籠城である。お前たち子供が私の飯の種を奪おうとしている。お前たちは私の同胞であるが私は八つ裂きにして殺さざる

をえない。お前たちはちっぽけな若者だ。お前たちはつまらない学生だ。お前たち69人が革命をしようとしている。私は命じられて獅子も兎も打ち据えるほどの全力を使わざるをえない。警視隊、憲兵隊、各旅団を集めてお前たち革命という敵を堡壘の中に十重二十重に取り囲んだ。

「獅子搏兎」という慣用句がある。獅子は小さな兎を捕まえるのにも全力を尽くすという意味だ。「搏獅搏兎」はそこから派生した表現だろう。

この加筆は政府側すなわち革命青年集団にとっては敵側の視点に転じて述べていることが明らかだ。抱一庵日記にも存在してはいない。学生集団が革命を意図していると明記した。反対側から描写すると憎悪を剥きだしにしたような表現になる。視野を広げるといふならばその可能性もあるだろう。しかしひとつの物語として見たばあい、あくまでも革命青年集団の視点を維持しなければ不統一だ。視線が乱れる。官兵が十重二十重に堡壘を包囲したと客観的に漢訳するだけで十分であった。不必要な加筆だ。しかし抱一庵日記をそのまま漢訳するだけでは満足しないのはいかにも喋血生らしい。

つづく部分も見ろ。

【抱一庵】堡壘内に楯籠れる六十九人の学生は、寂として声を掲げず。沈々又沈々。

1-2頁

【喋血生】巴黎籠城矣。沈沈復沈沈。我学生。我青年。何懼爾蛮武。我愛国性成。自由如命。何畏爾压制。 118頁

パリ籠城である。沈々又沈々。私は学生だ。私は若者だ。お前の野蛮な武力をどうして恐れようか。私の愛国という性質は出来あがっている。自由は命に匹敵する。お前の压制をどうして恐れようか。

抱一庵が記した「沈々（静まりかえっている）」の「々」は日本語で漢語にはない。喋血生は漢字を重ねざるをえない（ところが別の個所では使用している。『浙江潮』は日本東京で印刷されているから可能だった）。部分的に抱一庵日記を使用しているがそこ以外に加筆をする。強引に革命青年集団からの視線に切り替えた。しかも力が入り過ぎている。

以上を見れば喋血生が抱一庵日記をそのまま漢訳する考えがないことが明白だ。材料として使用しながら自分の思うがまま自在に改変するのである。

堡壘は包囲した圧倒的多数の兵隊から一斉射撃を受けた。

#### 抱一庵が改変し喋血生がさらに改変する

ここでは「紅色旗」をめぐる話題が中心である。掲げていた赤い旗が官兵の射撃によって撃ち落された。抱一庵は英訳を省略しながら大要を述べる。それを知るために赤い旗が落下する場面を引用する。

【英訳】 A fearful explosion burst over the barricade. The red flag fell. The volley had been so heavy and so dense that it had cut the staff, that is to say, the very point of the pole of the omnibus. Some balls, which ricocheted from the cornices of the houses, entered the barricade and wounded several men. p.167左右

堡壘の上で恐怖の爆音のはじけた。赤い旗が倒れた。その一斉射撃は非常に激しく集中していたから、竿、つまり乗合馬車のちょうど長柄の部分の折ってしまった。家々の軒から跳ね返った流れ弾が堡壘の中に入りこんで数人を負傷させた。

【抱一庵】 忽地一面を蔽ひ覆す弾煙硝霧、／堡壘の上に降りかゝる弾丸、宛がら霰の降るが如くなり。斯りしかども堡壘の裡は

沈々又寂々。／折しも堡壘の櫓に樹てありたる一旛の紅色旗、飛來の弾丸に其竿を貫射されて翻然落下す。 2頁

堡壘に掲げられた赤い旗は乗合馬車の長柄に結びつけられていた。それが撃ち折られるほどの激しい射撃であったことが具体的に描写されている。抱一庵は流れ弾で負傷した数人がいる以外はほぼ日訳した。

抱一庵は部分的に英訳のままを採用することがある。だが基本的には関係部分を取捨選択するから英訳のとおりにはいかない。上部に引き続いて次がある。

【抱一庵】此時まで眠るが如く晏然として古びたる椅子に凭りかゝれる、当組合の首領巴里大学の哲学部卒業生今茲(ことし)二十四歳の紅顔の美少年インジョルラスが脚下を距る二三歩の處に彼の旗は墜ちぬ。／是に於て渠(注：インジョルラス)の眼は灼然として始めて光輝を放ち、起ちて令すらく『硝薬を徒費する勿れ、敵をして更に近く迫らしめよ』斯くて徐ろに歩を移し、墜ち横はれる紅色旗を手を伸べて把りつ、衆を顧み『先づ之を再び高く掲げざるべからず、誰ぞある、誰ぞ之を掲ぐるを敢てする』 3頁

アンジョルラスを紹介している。だがそれに該当する英訳はない。抱一庵は彼を24歳とするが英訳は22歳である\*3。微妙に異なる。別の人物でも同じことを行なう(後述)。抱一庵にはそうする理由があったのだろう。だが説明しないからなぜ年齢まで改変するのかよくわからない。

「インジョルラスが脚下を距る二三歩の處に彼の旗は墜ちぬ」に当たる英訳は「彼は足元に落ちていた旗を拾い上げた [He picked up the flag wich had fallen just at his feet]」(p.167

右)だ。落ちた場所は同じ。拾い上げた描写は「墜ち横はれる紅色旗を手を伸べて把りつ」(3頁)として後ろに移動した。

アンジョルラスが同志に発砲をひかえるように言い、赤い旗を手にして再び掲げる者はいないかと問いかける。アンジョルラスの発言と所作が自然につながっているように抱一庵は翻訳した。いかにも英訳どおりにしたようにしか見えない。しかし英訳では「硝薬を徒費する勿れ」と発言したのは別人クールフェラック(Courfeyrac/コーフェラック)である。それに続く箇所を引用する。

【英訳】 ‘Comrades,’ cried Courfeyrac, ‘don't waste the powder. Let us wait to reply till they come into the street.’ / ‘And, first of all,’ said Enjolras, ‘let us hoist the flag again!’ / He picked up the flag wich had fallen just at his feet. (中略) / Enjolras continued: / ‘Who is there here who has courage? who replants the flag on the barricade?’ / Nobody answered. p.167右

クールフェラックは叫んだ。「同志たちよ、火薬を無駄にするな。彼らが通りに入ってくるのを待って応戦するんだ」／アンジョルラスは言った。「そして、まず第一にもう一度旗を掲げよう！」／彼は足元に落ちていた旗を拾い上げた。(中略)／アンジョルラスは続けた。「ここに勇気のある者はいるか？誰か堡壘に旗を立て直さないか？」／答えるものはいなかった。

クールフェラックをわざわざ出さなくても情況の説明には十分だと抱一庵は判断したようだ。そこを省略してアンジョルラスに入れ替えた。また部分的に加筆している。大筋は英訳のとおりだといつていい。

アンジョルラスの問いかけに答えるものはい

なかった、の部分に抱一庵は言葉を盛る。

「『誰ぞ!』『誰ぞ!』『誰ぞ!』/インジョルラスは三たび叫べり、一人の之に応ふるものなし」(4・5頁)。3度くり返させた。それでも応える者はいなかった。いくら革命青年だとはいえ旗を担って出れば射殺されるに決まっている。誰も申し出てこようとはしない。自然な心理だ。

喋血生はこの部分を圧縮しながら加筆も行なう。

【喋血生】血旗高綴揺々落日。裂帛一声。弾煙硝霧間。飛玉如雨雹。学生隊長英武士(巴黎大学哲学科卒業生。年二十四)。始以神光炯炯之眸子。注視敵[敵]軍而下警令曰。毋徒費彈藥。敵[敵]近乃擊。神彩飛揚。手握赤色令旗。右揮左指。忽焉大旗。被飛彈折。覺人叢中驟有聲曰。『旗!自由之標幟!旗!獨立之先声!』勿可折。勿可折。吾特來捧而旗。咄嗟。『誰』『誰』『誰』英武士三呼。仿佛一人影已由隅暗中飛出。而直立于六十九人之面前。 116頁

血の旗は高く掲げられ揺れながら日が落ちた。鋭く響く音がして弾丸火薬の煙のなかを弾が雨雹のように降り注いだ。学生隊長インジョルラス(パリ大学哲学科卒業生、二十四歳)は始めて鋭く生き生きとした目を輝かせ敵軍を注視して命令を下した。「弾薬を徒費する勿れ、敵が近づけば撃て」。顔つきは高揚して手に赤色の小旗を握り左右に振っていた。突然大旗が飛弾によって折られた。人群れの中から声が上がったと感じた。「旗だ!自由の標識だ!旗だ!独立の先触れだ!」。折らせてはならぬ。折らせてはならぬ。私が特別に担いで旗を掲げよう。「誰だ」「誰だ」「誰だ」。インジョルラスは3度叫んだ。どうやらひとつの人影が暗がりの中から飛び出してきて69人の面前に直立したようだった。

「令旗」は「令箭」と同じ。昔の中国で軍令に用いた三角形の小旗を指す。アンジョルラス(インジョルラス)は隊長だから小旗を持っていても不思議ではない。それが喋血生の考えだろう。しかしフランス人に中国風の小旗を与えたから違和感が生じる。喋血生は底本を無視して中国の格言、古典などを漢訳に挿入することがある。「令旗」もその例のひとつだ。部分的に中国化して不審に思わない。翻訳とはそういうものだと思っている。

しかもそれが「赤色」というのだから「大旗」との区別が曖昧にならざるを得ない。さらに旗について「自由、独立」と独自に関連付けた語句が仲間のなかから発言されたことにした。そのついでに進んで旗を掲げる人物を抱一庵とは関係なく前倒しして登場させている。申し出る者が誰もいないのでは革命集団としては具合が悪いと喋血生は思案したからだ。革命のためには進んで命を捨ててこそ革命者だという思い込みである。

抱一庵はアンジョルラスに「誰ぞ」と独自に3度叫ばせた。旗を再度掲げる者を求めて誰かいないか、と問いかけたのだ。一方の喋血生はそこを改変して誰かが「旗を掲げよう」という声をあげたことにした。アンジョルラスはそれを耳にする。そこで発言者したのは「誰だ」と3度叫んだ。喋血生は抱一庵訳を巧みに織り込みながら別の文脈を提示した。

また抱一庵はその人物について次のように述べている。「折から一個の人影、彷彿として一隅の闇中に現れぬ。一個の人影は躊躇として漸く寄り近づき、六十九士の面前に立現れぬ」(5頁)。喋血生はここをほぼそのまま使用した。

いくつかの不具合があるように見える。しかし抱一庵を知らなければ、という前提でここは十分に話が展開している。喋血生の漢訳を読んだ清末の読者は上の部分も何の躊躇もなく受け

入れたらう。喋血生は作家の才能に恵まれて  
いるという理由だ。

### 老人マブーフ

赤い旗を再び掲揚するのは誰か。登場したのは老人マブーフ (Father Mabeuf/マビー/馬畢) である。植物学者 (An old philosopher! a botanist! an inoffensive man! p.124左) で80歳 (this old man of eighty p.168左)。困窮した末に今はABCの友が籠城している堡壘にいる。抱一庵はマブーフについて違う説明を行なった。

【抱一庵】是れ、巴里大学校の庭園と生死を共にせむと自ら誓ひたる老園丁其齡は当年正に八十七歳、平生花に濯ぎ草に培ふを神聖の業と誇り、一年浮世に望を懸けじと自らも思ひ人も爾か思ふたる矍鑠の老翁、其名をマビーと呼ぶ者なり。 5頁

【喋血生】誰阿。一誓与巴黎大学共生死之濯園叟馬華。八十九齡之老壯士。今亦抛十八年培花植草神聖生涯。而来与聞革命事。 116頁

誰か。パリ大学と生死を共にすると誓った老庭師マビーだった。89歳の老勇者は、今18年間の花草を栽培する神聖な生涯を投げ捨て革命に参加しにきていたのだ。

マブーフをパリ大学の庭師としたのはアンジョルラスがパリ大学の卒業生だと説明したことに関連づけたからだろう。英訳では80歳だが抱一庵は87歳に老化させた。喋血生はさらに89歳と書き換える。そこまで老齡にしたのはより悲壯感を増大させるためだからか。「十八年」にしても数字を勝手に挿入する。底本のとおり漢訳する必要はあるなどは考えない。より状況を盛り上げるために手を加える、改変するのが漢訳だと思っている。

青年たちが恐怖にひるんでいる時にひとりの

老人が死を恐れずに行動してその結果射殺された。アンジョルラスが演説する。

【英訳】 ‘Citizens! This is the example which the old give to the young. We hesitated, he came! we fell back, he advanced! (後略)’ p.168右

諸君！これこそ老人が若者に与えた模範なのだ。私たちは躊躇したが彼は進み出した！私たちは後退したが、彼は前進した！（後略）

【抱一庵】是れ老齡が壯者に与ふる教誨なり。吾々は脚躓せり、渠は果決せり。吾々は後方に退却するに、渠は前方に突進せり。(後略) 11頁

【喋血生】諸君聴哉。馬華是長老而与少年之模型也。嗟嗟。吾脚躓。渠果決。吾党退却而後。渠独突進而前。 117-118頁

諸君よく聞け。マビーという長老が若者に与えた模範なのだ。ああ、我々は躊躇したが彼は決断した。我々は退却したが彼はひとり前に突進した。

アンジョルラスはマブーフの行為を賛美した。物語の流れではそうなる。しかし、この老人礼賛は喋血生にとっては必ずしも望ましいものではない。喋血生は革命青年集団を褒めあげるつもりで作品を選択したと思うからだ。『ABC組合』の最後まで漢訳した可能性はあるにしても低い。なぜなら『浙江潮』第9期にある喋血生「少年軍(三)」の続きが該誌第10期には掲載されていないからだ。読者から見れば漢訳は中断しているのが実際だ。結果としてこの老人賛美だけが残ってしまった。「少年軍(三)」という題名とここまでの内容が不一致である印象をぬぐえない。

喋血生漢訳2——第2・3回「一千八百三十二年！」

抱一庵の「一千八百三十二年！」である。「ABC組合」が1832年6月5日(6月暴動またはパリ蜂起)の一夜のみに出現したフランスの歴史的背景を説明するのが目的だ。背景解説だからABCの友は誰も登場してこない。

抱一庵第2回には奈翁(ハポレオン/一世)、ナポレオン3世(拿破崙第三)、シャルル10世(抱一庵はチャールズ10世/査魯十世)、フィリップ王(路易腓立布)、ルイ18世などの人名があげられる。ところが喋血生は抱一庵の訳文約7頁を10行に圧縮した。歴史的事実については興味を示していない。例えば「1832年のいわゆる7月革命[一千八百三十二年之所謂七月革命]」(119頁)などと間違っただけを書いた。7月革命は1830年だ。

事実について喋血生の認識がずれていることを示す。

【抱一庵】一千八百三十二年！これ往はバスチュール牢獄の毀たれたる一千七百八十九年より下ること四十有二年、また奈翁オートルローに聯合軍の爲めに破られたる一千八百十五年より下ること十有七年、13頁

【喋血生】勃休爾之冤獄毀矣(一千八百三十二年)。滑鉄盧之聯軍勝矣(一千七百八十九年後)。推倒一世。118頁

バスチュールの牢獄は毀たれた(1832年だ)。オートルローの連合軍は勝利した(1789年後だ)。奈翁を打ち倒した。

フランス革命の発端となったバスティーユ襲撃事件は1789年に発生した。ワーテルローの戦いは1815年だと抱一庵は記述している。だが喋血生は発生年が前後で間違っただけだ。

喋血生がここで新たに書き加えたのは革命を解説した語句である。抱一庵には存在しない。

【喋血生】不過革命者非徒破壊而無建設之

為革命。実随破壊而随建設之為革命。118-119頁

しかし革命とは、ただ破壊するだけで建設をしないものは革命ではない。実は破壊しながら建設するものが革命なのである。

抱一庵第2回の最後部分にもとづき喋血生は10行に圧縮した結末を締めくくる。

【抱一庵】斯の如くして復位後(レストレーション)十有五年間静思默慮せる仏蘭西は一千八百三十二年に及び、社会問題研究者をして其理想を実地に遂行せんとて振ひ起つまでに立至らしめたりけり。18頁

【喋血生】吾敢以一言相承認曰。一千八百三十二年之一年。是仏蘭西有史以来研究社会主義者。実行理想最名誉之一年。而亦鞏固革命機関成功之一大紀念年也。謂予不信。請読恐怖時期之歴史。119頁

私があえて一言で引き取って言おう。1832年という年はフランス有史以来、社会主義研究者が理想を実行したもっとも名誉のある年だ。しかも革命機関を強固にするのに成功した一大記念の年なのである。私が信用できないというのであれば恐怖時期の歴史を読みたい。

抱一庵の述べる「復位(王政復古)」は後に出てきて重複する。だからからか喋血生はここでは無視した。喋血生は日本語の「社会問題研究者」を漢訳して「研究社会主義者」(日訳は社会主義研究者)としたのが目を引く。抱一庵の翻訳に「社会主義者」という単語が出てくるのはだいぶ後ろの第4回32頁になってからだ。喋血生はそれを前に引っぱって来て「社会問題研究者」に置き換えた。

抱一庵第3回に移る。英訳では第4部第1章第4節に相当する。

【抱一庵】一千八百十五年より一千八百三十二年に至る十六七年間、レストレーション(復位)時代の静穏と閑暇の下に間断なく発達生長せる社会問題研究者なるものは、抑も何種、何階級に属せるものなるぞ？ 18-19頁

「レストレーション」すなわち復古王政(Restauraton)のこと。1814年のナポレオン没落後から1830年の王政復活までを指す。ここも抱一庵独自のまとめだ。英訳に該当する箇所は見えない。

一方の喋血生も独自の漢訳を披露している。

【喋血生】是拿破崙第一之雄氣。既随孤島潮声俱死。而路易十八復登苦惱王位(一千八百十五年維納會議前後)。時則法蘭西恐怖時期之幕大開。通国渴望。唯曰。平和！平和!! 119頁

ナポレオン1世の勇氣は孤島の潮とともに消えてしまいルイ18世が苦惱の王位に再びついた(1815年ウイーン會議前後)。その時フランス恐怖時期の幕が大きくあがり、国中は渴望してただ「平和！平和!!」と言うだけだった。

喋血生は復古王政を「恐怖時代」と言い換えた。ナポレオンとルイ18世を出してより具体的に説明している。別の資料を見ていることがわかる。それにしても前の部分で歴史の認識が間違っているのが不審だ。抱一庵が提示した社会主義研究者は無視した。いずれにしても日訳から離れている。

抱一庵は、王とその隷属者を除くフランス国民全員が社会問題研究者となったと述べる(20頁)。しかし英訳では異なる。それに該当する箇所は、思想家のある者は孤立し、ある者は集まって一学派、一団体を形成して社会問題つまり幸福の問題を追求していたとある\*4。抱一庵

も英訳から離れているのだった。次の箇所も英訳には存在しない。

【抱一庵】「如何にせば社会より飢餓を除くを得ん」「如何にせば人権平等たるを得ん」「如何にせば吾人は平和を永久に持続することを得ん」これ法蘭西国民が当時一般に思索し解釈せんと試みたる所の三大問題なりき。 20頁

【喋血生】(上至縉紳先生。下至屠沽走卒)而聚相議曰。如何而可除社会之飢餓。如何而可得人権平等。如何而可使真平和永久相継続。於是人権会上。乃有恐怖的臨時提議而前者希望政治的精神。乃全注重於社会主義。 119-120頁

(上は官吏先生から下は商人使い走りまで)集まって議論した。「どうすれば社会の飢餓を除くことができるか」「どうすれば人権平等を得ることができるか」「どうすれば真の平和を永久に相續させることができるか」。そこで人権会において恐れながら臨時に提議し進めたのが政治の精神を希望することだ。すなわち社会主義を全力で重視することだった。

抱一庵が提示したのは飢餓除去、人権平等、平和持続という3大問題である。喋血生はそこは取り入れながら「全注重於社会主義[社会主義を全力で重視する]」をつけ加えた。その表現は抱一庵にはない。しかし論理の前後をたどるとそういう意味になる。喋血生は根底にある部分を掬い上げた。

せっかく抱一庵は独自に3大問題を提起した。論題としていかにもありそうなものだ。ところがそれは抱一庵の創作だから英訳にある2大問題(富の生産とその分配)との関連が明確ではない。「三大問題、然しながら畢竟下の二大問題に帰着する所のものなりし」(20-21頁)と無理やり両者をつなげてしまう。

英訳 (p.14左右) ではふたつの問題とそれに  
関連する条項が箇条書きで示される。それを抱  
一庵と喋血生がほぼ同じ書式で翻訳しているか  
ら対照して示す。3者がここまで一致するのは  
本翻訳では珍しいからだ。

【英訳】 All the problems which the  
socialists propounded, aside from the  
cosmogonic visions, dreams, and  
mysticism, may be reduced to two principal  
problems.

社会主義者が提起したすべての問題は宇  
宙進化的な幻想、夢、神秘主義を別にすれ  
ば、ふたつの主要な問題に還元されるかも  
しれない。

【抱一庵】 畢竟下のの二大問題に帰着する  
所のものなりし。 20-21頁

【喋血生】 当時問題列後。 120頁  
当時の問題は次のとおり。

【英訳】 First problem: / To produce  
wealth.

【抱一庵】 ○第一問題。致富 (To produce  
wealth)

【喋血生】 ◎第一問題。致富 (To produce  
wealth)

【英訳】 Second problem: / To distribute it.

【抱一庵】 ○第二問題。富の分配 (To  
distribute wealth)

【喋血生】 ◎第二問題。富之分配 (To  
distribute wealth)

【英訳】 The first problem contains the  
question of labor.

【抱一庵】 ▲第一問題は労働問題を含む。

【喋血生】 ▲第一項。含有労働問題。

【英訳】 The secon contains the question of

wages.

【抱一庵】 ▲第二問題は賃金問題を含む。

【喋血生】 ▲第二項。含有賃金問題。

【英訳】 In the first problem the question  
is of the employment of force.

【抱一庵】 ▲第一問題に於ては労力使用法  
が疑問なり。

【喋血生】 ▲第一項。以労力使用法為疑問。

【英訳】 In the second of the distribution of  
enjoyment.

【抱一庵】 ▲第二問題に於ては快樂分配法  
が疑問なり。

【喋血生】 ▲第二項。以快樂分配法為疑問。

【英訳】 From the good employment of  
force results public power.

【抱一庵】 ○労力の善用より、公共権力  
(パブリックパワー Public power) は結果  
し来る。

【喋血生】 ◎由善用労力法。而得公共権力  
(public power) 之結果。

【英訳】 From the good distribution of  
enjoyment results individual happiness.

【抱一庵】 ○快樂の正当配分より個人幸福  
(インヂビヂユアル、ハツピネス  
Individual happiness) は結果し来る。

【喋血生】 ◎由快樂の正当配分。而得個人  
幸福 (Individual happiness) 之結果。

【英訳】 By good distribution, we must  
understand not equal distribution, but  
equitable distribution. The highest  
equality is equity.

良い分配とは平等な分配ではなく公平な  
分配であることを理解しなければならない。  
最高の平等は公平である。

【抱一庵】爰に云ふ分配を平等分配と解せば謬れり。労に対する相当分配と解すべし。／正しき意味に於て平等 (Equality) は公平 (Equity) と意義を同じくす。

【喋血生】漢訳なし

【英訳】From these two things combined, public power without, individual happiness within, results social prosperity.

【抱一庵】○此等二つのものの結合(外には公共権力(パブリックパワー Public power。内には個人幸福(インデビデュアル、ハツピネス Individual happiness)より社会の繁栄は結果し来る。

【喋血生】◎由二項問題之結合。外則為公共権力。内則為個人幸福。而社会之繁栄。乃磅礴鬱積而靡涯。

ふたつの問題が結合することにより外には公共権力、内には個人幸福となり、そうして社会の繁栄は盛大広大で限りがなくなる。

【英訳】Social prosperity means, man happy, the citizen free, the nation great.

【抱一庵】社会の繁栄とは、個人(マン)は幸福に、市民(シチズン)は自由に、国民(ネーション)は強大になるを謂ふ。

【喋血生】漢訳なし

以上の部分は抱一庵は英訳どおりだ。喋血生は一部の省略を除いてほぼ忠実に抱一庵を漢訳した。せいぜいが一部を省略をただけ。最後部分の「社会の繁栄とは……」以下を喋血生は漢訳しなかった。そのかわりに別物を書き加えたのがいかにも喋血生らしい。漢訳は手を加えることだと考えている。

【喋血生】然後知<sup>7</sup>月<sup>7</sup>革命後。国内不<sup>7</sup>因<sup>7</sup>鋒刃之<sup>7</sup>苦。反<sup>7</sup>增<sup>7</sup>經濟<sup>7</sup>勃<sup>7</sup>興<sup>7</sup>之<sup>7</sup>現象者。実此二問

題為社会主義之左右力。革命之魂。鑄造文明之機械也。法蘭西国史之所以有一千八百三十二年之一年。其亦原因于此乎。 120-121頁

知られるのは7月革命後、国内は戦争の苦しみがないために経済勃興という現象が生じたことだった。実にこのふたつの問題は社会主義が左右する力となり、革命の魂は文明を鑄造する装置なのだ。フランス国史に1832年という年がある理由はまたここに原因するのである。

喋血生は「富の生産と富の分配」というふたつの問題に社会主義と革命が深いところで結びついていることを強調した。その把握は間違っていない。ただし細かいところで誤りを引きずる。まえに誤記していた「1832年のいわゆる7月革命[一千八百三十二年之所謂七月革命]」(119頁)をくり返した。ここは「(1832年)6月暴動後」でなくてはならない。

英訳、抱一庵と喋血生がほぼ一致するのは本書では珍しいとくり返す。ただし全体を見れば抱一庵、喋血生ともに独自に改変する傾向が強いのはいうまでもない。

## 結 論

抱一庵が一部を除いて英訳をそのまま日訳していないのは以上のおりだ。同様に喋血生も抱一庵訳によりながらも自由自在に漢訳した。

そこで疑問が発生する。喋血生の興味は主としてABCの人そのものにある。ゆえに漢訳題名が「少年軍(三)」である。ならばフランス革命の歴史的背景などは省略してもよかつたのではないか。アンジョルラスらABCの人に焦点を当てた第5回に跳んで漢訳する方法も考えられたのだ。喋血生はそれくらい大胆な改変を実行するだけの実力を持っている人だと見ていられる。そうしていない理由は不明だ。いくら喋血生が自由奔放であったからといって底本をまっ

たく無視はできなかつたとも考えられる。作品によって異なるとしかいうことができない。

漢訳は完成していたかどうかは不明だ。未完で終わった可能性が高い。結果として掲載が中断したのは喋血生にとっても不本意な結果だったのであろう。完成していたのなら結末で読者の意表をつく意外な書き換えをしていたかもれない。探偵小説でその例を見せている。それが確認できないから残念だと思う。

抱一庵の翻案を喋血生はさらに翻案した。部分的にしか読むことができない事実だけが残る。惜しいことだった。これが本稿の結論である。☐

【参考文献】

抱一庵主人「『哀史』を読む」『早稲田文学』第99-100号 1895.11/第一書房1978復刻。国会図書館所蔵/複写あり

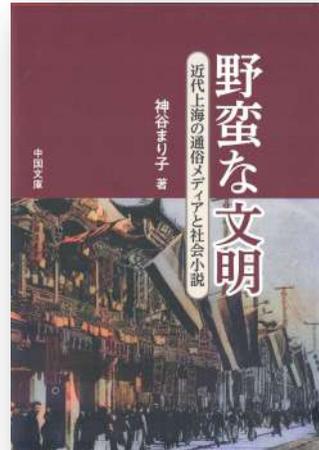
ヴィクトル・ユゴー著、齋藤正直訳『レ・ミゼラブル』IV、V 潮文庫1970.4.20、6.20

【注】

- 1) 梁艷「原抱一庵訳「ジヤンバルジアン」の底本について」『COMPARATIO』14 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会 2010.12.20 電字版
- 2) 英訳第3部「マリユス」第4章「ABCの友」 p.49右。The *abaissé* [the abased] were the people.注：ABC in French, is pronounced ah-bay-say, exactly like the French word, *abaissé*.
- 3) He was now a man, but he seemed a child still. His twenty-two years of age appeared seventeen; III p.50左
- 4) These thinkers, some isolated, others gathered into families and almost into communion, were turning over social questions, peacefully, but profoundly; (中略) / These men left to political parties the question of rights, they busied themselves with the question of

happiness. p.17左

これらの思想家は、ある者は孤立し、ある者は家族のように集まり、ほとんど一党派のようなものを作り、社会問題を平和的にしかし深く掘り下げていたのである。(中略) / この人たちは権利の問題は諸政党に任せて自分たちは幸福の問題に没頭していた。



神谷まり子『野蛮な文明——近代上海の通俗メディアと社会小説』

中国文庫2023.10.6

序章 社会小説とはなにか、

I メディアと作家、

第1章 職業作家の誕生——李涵秋『広陵潮』、

第2章 都市訪問者の上海遊興物語——『海上繁華夢』、

第3章 朱瘦菊『歇浦潮』——革命の「事実」と「虚構」、

第4章 包天笑『上海春秋』——上海人の物語、

II 女性像——ジェンダーとセクシャリティ、

第5章 『九尾亀』から『九尾亀続集』へ——ミソジニーの女性像と近代中国の男性性、

第6章 『中国黒幕大観』の女性像——悪のヒロインたち、

第7章 「野蛮」な「文明」——社会小説に描かれる文明結婚、

第8章 自動車に乗る女——『新歇浦潮』に描かれる「自由」、

おわりに——辮髪を半分切り落とす、

あとがき、

参考文献、

索引

## 喋血生の評論3篇

沢本郁馬

喋血生は小説以外に論文3篇を『浙江潮』に公表している。「訳」の表示はない。すなわちある特定の日本語論文を漢訳したという認識はない。1篇については日本語の参考文献を漢訳で記す。参考資料を使用したか喋血生にしてみればあくまでも独自の論文なのだ。

梁艶+王玉(2020)\*1が「底本」を指摘して詳しい。本稿はそれを参考にした。また「底本」ではなく参考文献、資料、材料などの用語を使用する。

喋血生の評論はどの部分が資料を使用した漢訳でどこが独自の見解なのか。その内容を検討する。

評論文3篇は以下のとおり。誤りは正し原書など一部を補記した。また「追加」「注」は筆者。

1 喋血生「維廉蒲斯夫婦合伝」伝記欄『浙江潮』第4期 癸卯四月二十日(1903.5.16) 影印本

西川光次郎「ウ井リヤム ブース(救世軍の創設者)」東京評論社編『人道之偉人』中庸堂1901.5.20。

追加1:無署名「救世軍の母 故ブース婦人の少かりし時(上、続)」『家庭雑誌』第6、7号 1893.2.15、3.15。次に収録されたものと同

文。

追加2:蘆花生(徳富蘆花)編「社会改良運動の母」の「(二)ブース夫人」『世界古今名婦鑑』民友社1898.4.19。139-151頁。以上の日本語著作は国立国会図書館デジタルコレクション所収

2 喋血生「中国開放論」論説欄『浙江潮』第6期 癸卯六月二十日(1903.8.12) 未完 影印本

ぼーる、えす、らいんしゅ著、吉武源五郎訳述「第2部 支那ノ開放」『世界政策』世界堂1903.5.22。国立国会図書館デジタルコレクション所収

追加1: PAUL SAMUEL REINSCH “WORLD POLITICS AT THE END OF THE NINETEENTH CENTURY AS INFLUENCED BY THE ORIENTAL SITUATION” (1902) NEW YORK: THE MACMILLAN COMPANY, 1904. hathi trust 所収

第2部 支那ノ開放→中国開放論

第1章 支那ノ社会及ヒ政治的特質→第1章 中国開放門戸之原因(注:必ずしも一致していない)

第2章 外国民ガ支那ニ於テ獲タル利益ノ実質→第2章 中国特贈於異種之権利(注:表が一致する)

追加2:先行する別訳がある。ポール、エス、ラインシュ著、高田早苗口訳、佐藤三郎筆記『帝国主義論』東京専門学校出版部1901.12.7。また同じくレイニッシュ氏『十九世紀末世界之政治』(刊年不記)も。国立国会図書館デジタルコレクション所収。原題訳名『東洋問題の影響を被りたる十九世紀末世界の政治』。喋血生が『世界政策』と記している。ゆえにこれらは参考文献ではない。

3 喋血生「斯賓塞快樂派倫理学説」哲理欄『浙江潮』第9期 癸卯九月二十日(1903.11.8) 未完 影印本

ジョン、ワトソン著、網島栄一郎補訳「第9

章 ハーバート、スペンサーの倫理説』『快樂派倫理』東京専門学校出版部1901.10.15。167-184頁。国立国会図書館所蔵。[梁王136-37]は「底本」とは記さず「根拠——訳述」とする。

追加1: JOHN WATSON “HEDONISTIC THEORIES FROM ARISTIPPUS TO SPENCER” GLASGOW: J. MACLEHOSE & SONS; LONDON AND NEW YORK: MACMILLAN & CO., 1895. google books 所収

追加2: 参考までに『梁川全集』第3巻 春秋社1922.7.30所収

発表順に見ていく。

## 1 「維廉蒲斯夫婦合伝」

喋血生が執筆の際に参照した材料のひとつが日本語の『人道之偉人』だ。書名のとおり人道の偉人と認められた人々を集めて紹介する(名と姓を1字空けにしているからそのまま示す)。ウ井リヤム ロイド ガリソン、ブーカー ワシントン、レオ トルストイ、ジョセフ ダミエン、フロレンス ナイチンゲール、ウ井リヤム ブース、ジョン ハワード、エミール ゴラだ。多彩である。

喋血生はそれらの中から救世軍の創立者ウィリアム・ブース(漢訳: 維廉蒲斯)を選択した。この紹介文は西川光次郎の筆になる。「訳」の表示はない。西川はなにかの文献によってまとめたらしい。

### ブース伝

救世軍はキリスト教プロテスタントの一派、慈善組織。軍隊式の組織編制を採用する。1865年イギリスのブース夫妻が設立した(当初は東ロンドン伝道会からキリスト教伝道会へ。1878年に改称)。

西川の紹介文はウィリアムを中心に救世軍の

設立とその歴史を述べる。ところが喋血生はそれを夫妻合伝に拡大した。西川の文章だけしか知らない人はこの漢訳題名を見て不審に思うはずだ。西川は妻キャサリンの経歴について詳しくは述べていない。結婚する時に彼女の名前を出したくらいのこと。それが喋血生ではどうして夫妻合伝になるのか。

夫はウィリアム・ブース(WILLIAM BOOTH、1829-1912/ウ井リヤム・ブース/維廉蒲斯。注: 英文/西川/喋血生の順)、妻はキャサリン(CATHERINE BOOTH、1829-1890/カザリン/克若霊)である。

西川の冒頭を引用したのちに喋血生と比較対照する。

【西川】慈悲!!汝は此の語を聞きしか、此の語の力を解せるか、慈悲!!汝は此の語の隠れたる計るべからざる意味を知れるか、慈悲!!此の語を如何なる微風の上にもあらしめよ、慈悲!!凡ての罪が清められ凡ての汚点が去らるゝまで此の語をして世界を廻はらしめよ、地に救の洪水来りて凡ての人が此の生命を与ふる流れに浴し得るまで此の語をして世界を廻はらしめよ(ブースが二十歳の時友に与へし手紙の一節)。95-96頁

西川はブースの手紙を直接引用することから伝記をはじめた。「汝」はブースの友を指す。手紙の内容は「慈悲」を世界に広めろという趣旨である。

喋血生は西川のままに文章をなぞらない。特に「汝」の使い方が微妙に異なる。

【喋血生】蒲斯夫婦何人也。世界的普救主也。蒲斯夫婦何人也。有彼而乃造世界。有彼而一切衆生乃真有父母也。/『慈悲!!!汝聞此語乎。慈悲!!!汝解此語之力乎。慈悲!!!汝可不深究此語之隱乎。慈悲!!!吾願借汝以滅絶生老病死一切苦。慈悲!!!吾願負汝為旗

幟以廻繞於世界勾銷罪孽字』／大哉願力。乃蒲斯弱冠時与友人書之一節。開救世軍門戸之鍵也。 65頁

ブース夫妻とは何者か。世界の救済主である。ブース夫妻とは何者か。彼らがいる世界が造られた。彼らがいる全ての生き物が本当の父母を持ったのだ。／『慈悲!!汝はこの語を聞いたことがあるか。慈悲!!汝はこの語の力を理解するか。慈悲!!汝はこの語の秘密を深く追究しないのか。慈悲!!慈悲により生老病死という一切の苦痛を絶滅させることを吾は願う。慈悲!!慈悲を旗とし世界にめぐらせることによって罪業という言葉の根絶することを吾は願う』／大いなるかな願いの力よ。すなわちブース20歳の時、友人にあたえた手紙の一節だ。救世軍の門戸を開ける鍵なのである。

喋血生は論文を執筆している。もともと資料を直接漢訳する考えはない。漢訳するにしても立論の一部として組み込んだ。前後に一言加筆したのが喋血生による解説である。「救済主」「父母」「鍵」という説明を加えた。

救世軍について説明しているにもかかわらず「生老病死一切苦」「衆生」「願力」などという仏教用語を混入させる。喋血生が日常的に思考するなかに仏教語があったらしい。それが自然に出現した。

それにしても手紙の中の「汝」が指すものが前後で異なっているようにしか読めない。前の汝はブースの友人だ。後ろの汝は慈悲そのものになる。おさまりが悪い。

救世軍を理解するための鍵語として「慈悲」を提示した。「慈悲」は仏教用語とっていいが西川が使用したから喋血生もそれに従った。

西川は上につづけて述べる。「敬虔献身の精神と才能手腕が同一身体に宿ることは極めて稀なれども、両者を兼有せる人にあらずんば決して真に人の首導者たる能はず」、「此の首導者

の典型とも云ふべき偉人の一生より学ぶ所あらしめよ」(96頁)。ブース伝の前書きである。そうしてブースの生誕に筆を進める。伝記らしい一般的な書き方だ。

しかし喋血生はそれを無視してまったく違うことを記述する。

【喋血生】救世軍何謂者也。日日革命日日倒政府。日日為衆生求平等自由。儼然行軍於通都達衢。交戰於青天白日。有聯隊。有士官。有將校戰也。有令。守也有法。吾嘗過繁華都會。車麟麟。馬蕭蕭。電光雪白游人雜遝。忽救世軍來戰鼓冬冬。戰旗舒舒軍樂交作。一領國民軍。口且演。足且進威風凜凜。群撮足避道。莫不呼且祝曰。大慈大悲。救世軍萬歲!!!萬歲!!! 65-66頁

救世軍とはどういうものか。毎日革命し毎日政府を打倒する。毎日生き物のために平等自由を求める。大都市大通りをいかめしく行軍し白昼に交戦する。連隊があり士官がいて将校が戦うのだ。命令があり守るにも法がある。私はかつて繁華な都会を通ったことがある。車とどろき馬いなき電光白く観光客でごった返すなか突然救世軍がやって来て陣太鼓をドンドン、戦旗をヒラヒラさせて軍楽を同時に演奏した。国民軍を率いて演説しながら足を進めて威風堂々としている。群衆は足を抜き道を避けて喜び祝い叫ばないものはいなかった。

「大いなる慈悲よ。救世軍萬歲!!!萬歲!!!」

この文章は西川には存在しない。喋血生の作文だ。「吾」すなわち喋血生本人が文中に登場している。ここは注目点である。救世軍の行軍を説明して具体的だ。1895年に救世軍は日本へ進出した。それ以後であれば救世軍の行進を喋血生は東京で目撃したかもしれない。時間的には合致しそうだ。上の描写を見てその可能性があると感ずる\*2。

救世軍について喋血生がどのように理解したかを見てみよう。

軍隊組織を採用しているから将校がいるし「血と火の旗 [血及火之軍旗]」(西川102頁/喋血生68頁)があり軍楽隊も演奏する。平等自由を求めるといふ。毎日軍隊式に困窮者救出作戦を実行しているというのなら意味もわかる。しかしながら救世軍が「毎日革命し毎日政府を打倒する [日日革命日日倒政府]」と突出させて書くのは許容範囲を超えている。「政府を打倒する」とはまるで革命集団であるかのような印象を与える。だが喋血生自身はそう考えていた。同じ語句をくり返し次のような説明もする。「救世軍は実に宗教の体面を借りて旗印としたのである [救世軍者実借宗教的面目為旗幟也]」(66頁)。宗教を隠れ蓑にした革命集団だといふのである。実態とはかけ離れた説明だ。

喋血生はその「革命党」と関連することも書いている。次も喋血生の作文だ。

【喋血生】救世軍团的運動。有王党。有政党。有温和党。有進歩党。有革命党。有虚無党。有無政府党。合一切社会人物。一鑪而鑄之。 66頁

救世軍团的運動には王党もおお政党もある。温和党、進歩党、革命党、虚無党、無政府党などすべての社会人物が合わさってひとつの鑪で鑄られたものである。

王党と革命党を同居させることはできない。水と油だからだ。いかなる政治体制のものにおいても困窮者救済活動を行なうということをお願いののだろうか。

政府が救世軍の慈善事業を援助するというのはある。けれども救世軍はもとから政府とは一線を画す団体なのである。救世軍はこの世のものではないが政府はこの世に属している。つまり両者は無関係であると主張しているのだ\*3。救世軍と政治を無理やり結びつけて「政府を打

倒する」と説明したのは余計だった。

喋血生は上文のとおり各種団体をあげた。もともとなったのは西川だろう。次の文章から暗示を受けたうえで独自にいくつかの単語を加えたと考えられる。

【西川】瑞西は政治的亡命者は勿論無政府主義者や虚無党員にまで自由を与へ居る国なるにも係はず独り救世軍の侵入には不思議にも種々なる迫害を加へたり。 107頁

【喋血生】夫瑞士者自由世界之中心点也。若政治亡命者。若無政府主義者。若虚無党革命党。而地主皆倒履迎之。独救世軍入偏待以閉門羹。 69-70頁

スイスは自由世界の中心地である。政治亡命者であろうが、無政府主義者であろうが、虚無党革命党であろうが人々は熱烈に歓迎したのだ。ただ救世軍が入るとことさら門前払いを食わせた。

「倒履而迎」は履物を逆にはくくらい慌ただしく喜んで客を迎えること。喋血生は漢訳小説に中国慣用の語句を挿入することがあった。評論文でもそれと同じことをして飾る。

救世軍の初期には迫害される時代があったと解説する文献がある。関係者は活動中にしばしば乱暴狼藉に遭遇した。ブースは反対者から攻撃された時の対処法を記述している。

【西川】攻撃に答ふる勿れ、唯だ進めよ、進んで成功し成功によって吾等の正当なるを説明せよ。 103頁

【喋血生】凡遇攻撃。有進無退。進則成功退則自殺。 68頁

攻撃に遇ったならば進め。退くな。進めば成功であり退けば自殺である。

暴漢から攻撃されたばあい無抵抗であることをブースは説いている。暴徒は救世軍人が抵抗

をしないところにつけ込んだ。それに当局者が迫害を加えることが重なる。その結果救世軍人のほうが不法の待遇を受け入牢させられることも見られた\*4。

喋血生の文章は「攻撃されたら反撃するな」という肝心な部分を省略している。ゆえに続く喋血生の文章は間違った方向に展開して救世軍が説明していることから離れる。

【喋血生】蓋救世軍草創時國中流民多反對之。第一次行軍。群無賴託討戰以与之惡作劇。遂以互毆打致命。裨將三人坐殺人罪而受戮。蒲斯亦下獄焉。 68-69頁

そもそも救世軍が創設された頃、国中の流浪の民は多くこれに反対した。最初に行軍した時ならず者の群れが戦いを挑んできて嫌がらせを行なった。ついには互いに殴打し命にかかわった。副将3名が殺人罪に問われ処刑されブースもまた下獄したのである。

救世軍が草創期に反対にあったという前半は事実である。問題があるのはそれに続く説明だ。副将が殺人罪で死刑になった。さらにブースも入牢したという。まるで救世軍反対派の言いそうな事柄だ\*5。ここは疑問である。

まず救世軍人が反撃する個所に違和感が生じる。ブースが教えた無抵抗とは矛盾するからだ。明らかに喋血生は誤解している。喋血生はなにか反対派の書いた別の文献に拠ったのだろうか。疑わしい。

救世軍関係の文書を見れば暴徒に襲われて負傷する事例は多く報告されている。だが殺害されてはいない。記述があるのは断頭台に登られる、つまり殺された例がないだけでそれ以外のあらゆる艱難辛苦をなめたという歴史的経過説明だ。さらに救世軍人が殺人を犯した事件は見られない。ましてや死刑になったという記録も見つからない。ブースが1年間入牢したと述

べる文献もないのだ。

救世軍という軍隊風の名称に喋血生は惑わされたのではないか。後半の殺人部分は喋血生の創作だと考えざるをえない。ブースの肝心な信仰部分について喋血生の認識が誤っていることになる。評論文に間違った説明を挿入すべきではなかった。

### ブース夫人伝

ブースの妻キャサリン(カザリン/克若靈)について西川が述べることは少ない。「一はカザリン、マンフオードなる女と知り互に其品性才能に感じて千八百五十五年遂に結婚するに至りしことにして」(96頁)、「カザリン マンフオードは殆んど彼に比肩し得る程の女丈夫にして」(100頁)とあるだけ。

この前部分は喋血生も西川にもとづいて書いている。すなわち喋血生は「千八百五十五年蒲斯与婦人遂結婚」(67頁)と直訳した。

以下に喋血生が西川にない説明を行なっている例を掲げる。

【喋血生】千八百九十年慈悲之母蒲斯夫人永眠日也。 67頁

1890年は慈悲之母ブース夫人が永眠した日である。

喋血生がここに参照したのは蘆花生編「社会改良運動の母」の「(二)ブース夫人」(『世界古今名婦鑑』民友社1898.4.19。先行するのは無署名「救世軍の母 故ブース婦人の少かりし時」『家庭雑誌』1893)だ。すなわち「去る千八百九十年の秋ブース夫人の永眠するや」(140頁。ルビ、傍線省略)とほぼ一致する。

喋血生は徳富蘆花の『歴史之片影』(1893)から1篇、『外交奇譚』(1898)から1篇、『探偵異聞』(1900)から3篇合計5篇の小説作品を漢訳している。喋血生にとって蘆花はなじみのある作家だといえよう。

それがわかれば西川になく喋血生にある文章が蘆花から引かれているのも納得がいく。並記する。ほぼ同じだから翻訳しない。

【蘆花】今や四千二百九十余隊の兵士は列国に散布し、一万六百余名の将校指揮を掌どり、其軍旗は三十五ヶ国に翻れり。 139頁

【喋血生】吾数其軍士。今凡四千二百九十余聯隊。吾調査其指揮長。今凡一万六百余上將。吾瞻望其軍旗翻于世界者。今凡三十四国。 66頁（注：この吾は喋血生を指す）

【蘆花】五歳になりし時は低き足凳の上のり母の傍に立ちて聖書を読むを常とし、 143頁

【喋血生】夫人則五歳牙牙読聖書以養成其愛力。 67頁

【蘆花】ブース夫人は十二歳より禁酒事業の手始をなしぬ。十二歳の年夫人は少年禁酒会の書記となり、 144-145頁

【喋血生】夫人年十二為少年禁酒会書記。 67頁

喋血生は上の記述と重複してもう一度ブース夫人について説明する。短い文章だからまず喋血生漢訳の関連する全体を示す。あとで分解してそれぞれを翻訳して解説する。

【喋血生】夫人名克若靈。幼而失恃。寄生于叔母家。受苛刻冷淡之家庭教育有年焉。父馬克福兒特。為英国名牧師。性尤嚴謹。故夫人于読聖書外。一切書冊禁閱之。然夫人幼慧。五歳能背誦聖書。年十二少年禁酒会起。夫人投身任書記。私著禁酒雜誌。 71頁

以下に蘆花（140-145頁）から該当する部分を引く。

【蘆花】ブース夫人は名をカザリンと呼びぬ。

【喋血生】夫人名克若靈。

夫人の名はカザリンという。

この部分は蘆花をそのまま漢訳した。次が問題だ。

【蘆花】母はミルウアルド家の女にて、幼なく母を失ひ、父は冷淡叔母は苛刻の愛なき家庭に育ちしが、

【喋血生】幼而失恃。寄生于叔母家。受苛刻冷淡之家庭教育有年焉。

幼くして母を失い叔母の家に身を寄せ苛刻冷淡の家庭教育を多年受けたのだった。

蘆花が記述しているのはブース夫人の母親についての経歴だ。それを喋血生はキャサリン（ブース夫人）その人のものと誤記した。誤解である。

【蘆花】メソヂスト派の牧師ジョンマクフオールド氏なる者嬢を恋ひて求婚せしに、（中略）斯くてミルフアルド嬢はマクフオールド夫人となり、夫妻の間に生れたる女子は即ち後来のブース夫人なりし。（中略）マクフオールド家族にては小説を読むことを嚴禁し、仏蘭西語もいたく嫌はれたり。ブース夫人の母の謂へらく、小説は真実あらず、仏語を知るは不信猥陋の小説的文学を知るの緒なりと。

【喋血生】父馬克福兒特。為英国名牧師。性尤嚴謹。故夫人于読聖書外。一切書冊禁閱之。

父マクフオールドはイギリスの名牧師であり性格はとりわけ謹厳だったから夫人は聖書を読むほかには一切の書物を読むことを禁じられた。

蘆花のいうマクフオールドはJOHN MUMFORDのこと。喋血生はキャサリンの母と父の結婚および彼女の生誕を省略した。いきなり父親を登場させる。家で小説の閲覧、フランス語(仏語)の学習を禁止した理由は無視した。それをまとめて聖書以外は「一切の書物を読むことを禁じられた[一切書冊禁閱之]」に言い換えた。

【蘆花】夫人は三歳より聖書を読むことを教へられ、五歳になりし時は低き足凳の上ののり母の傍に立ちて聖書を読むを常とし、(中略)ブース夫人は十二歳より禁酒事業の手始めをなしぬ。十二歳の年夫人は少年禁酒会の書記となり、形の如く集会を開き寄附金を集め、時々は吾寝室に閉ち籠りて禁酒雑誌に送るべき匿名の投書を認めたり。

【喋血生】然夫人幼慧。五歳能背誦聖書。年十二少年禁酒会起。夫人投身任書記。私著禁酒雑誌。

しかし夫人は幼くして賢く5歳で聖書を暗唱することができた。12歳で少年禁酒会がはじまると夫人は書記となり禁酒雑誌に書いた。

ここも喋血生は要約している。蘆花が「十二歳にならざりし間に早くも新旧約書を八回もくりかへし読みぬ」(143頁)と説明したのを「5歳で聖書を暗唱することができた[五歳能背誦聖書]」に変更した。中国の知識人を念頭に置いたものだろう。理解はできるが評論文としては正確ではない。

ブース夫人について喋血生は蘆花の文章を取捨選択してつなぎ合わせた。人間関係の説明に誤解があることもわかる。要約したことが目立つ。

清末の読者は蘆花の文章を知らない。間違ったことが書かれていることには気づかなかつただろう。細かい個所だから喋血生も重きを置かなかつたらしい。

ひとつ注目する個所がある。次のとおり。

【喋血生】嗚呼。其何日来支那也。我臨風九頓首率四万万同胞香花請。香花迎。70頁

ああ、いつ支那に来てくれるのか。私は風を受けて9回叩頭し4億の同胞を率いて香りの高い花を招聘し香りの高い花を歓迎する。

「香花迎香花請」は仏教語だという。喋血生のほかの評論文にも仏教語が出てくるからその教養があるとわかる。「支那」について別論文では「中国」に置き換えている例がある。だがここは地の文で喋血生が使用する。喋血生は救世軍を「香りの高い花」にたとえた。4億の同胞を代表して救世軍が中国に進軍するのを願望するのだ。ここは喋血生の主張である。

以上、喋血生は主として西川と蘆花を材料に使用した。両者を参照し一部漢訳しながら独自に加筆をしたのがブース夫妻伝だ。両書の大筋はたどっているといつていい。しかし見逃せない欠陥はブースの考えでないことおよび経歴について作文して事実から離れた部分を挿入したことだ。評論文としては不適切な個所を含んでいるといわざるを得ない。

最初に見たとおり喋血生は漢訳したとは書いていない。使用した材料も明記しないし自由に加筆改変をする。その理由は推測できる。

喋血生は日本語文献1篇をまるごと漢訳する考えは毛頭なかった。複数の資料を使用して独自の評論文を書くのが目的だったのだ。使用した文献はあくまでも論文執筆ための材料にすぎない。自分なりの論文だから「訳」と表示しなかった。

くり返す。喋血生はある特定の文献を漢訳したのではない。資料を参照して自分独自の論文を公表した。そう見定めて以下を続ける。

## 2 「中国開放論」

喋血生がひとつの資料を示している。珍しい。前言に相当する部分に「多くはアメリカ政治学教授ぼ一る、えす、らいんしゆの『世界政策』一書を参照して成った〔多據美国政治学教授普愛斯卿休世界政策一書参酌而成〕」(11頁。傍線略)と述べている。

ポール・サミュエル・ラインシュ (PAUL SAMUEL REINSCH、1869-1923)、アメリカの政治学者。駐北京アメリカ公使のち北京政府の最高顧問を務めたという。

たしかに吉武源五郎訳『世界政策』に該当する。ならば「ぼ一る、えす、らいんしゆ」を漢訳して「普愛斯卿休」(傍点筆者)とするのは奇妙だ。「ぼ一る」が「普」、「えす」は「愛斯」まではいい。だが「らいんしゆ」を漢音訳して「卿休」にはならない。これでは「ちいんしゆ」だ。どうやら日本語のひらがな「らいん」を「ちいん」と見間違えて「卿qing」を当てたらしい。

漢訳者が日本語カナを誤読するのは多くはない。あるといえば呉禱の「ブラック〔勃拉錫克〕」(ツとシ。1905)、包天笑の「ソートレーキ〔靈脱蘭記〕」(ソとり。1910)がその例だ(傍点部分が誤記)。

それはさておき参照資料がラインシュ著、吉武訳『世界政策』であることを確認しておく(以下吉武)。決め手は第2章に収録された表2点ほかだ。「支那対諸国貿易額ノ分配〔中国貿易統計表〕」(149頁/19-20頁)と「支那ノ各開港地ノ外国居住民ノ総数・国別表〔列国人民居留者列表〕」(149-150頁/20頁)ほかの数字が一致する。なお吉武に使用されている「支那」は喋血生によりすべて「中国」に置き換えられている。本稿では引用する際に原文どおりとする(吉武では支那を、喋血生では中国を使用する)。

喋血生論文の内容の骨子は以下のとおり。

## 第1章 中国開放門戸之原因

1 善講大同学

2 善解同化力

## 第2章 中国特贈於異種之權利

1 鉱業特権

2 貿易特権

表あり

吉武の「第2部 支那ノ開放」を喋血生は「中国開放論」に改変した。ここはわかりやすい。門戸開放とは中国進出に出遅れたアメリカが提出した強国側の「支那ニ於ケル平等開放ノ政策」(181頁)を指す。

次に検討するのはそれぞれが吉武のどの部分を参照したかだ。

## 第1章

吉武の「第1章 支那ノ社会及ヒ政治的特質」は喋血生の「第1章 中国開放門戸之原因〔中国が門戸を開放した原因〕」という。

吉武と喋血生の冒頭を見てみる。

【吉武】支那ニ於ケル最近發達 (Recent developments) ニヨリ政治世界ノ全光景ニ變化ノ突飛ニ現ハレタルコト実ニ前古無比ナリ。 94頁

【喋血生】馴獅!!馴獅!!!我中国真馴獅。斂牙縮爪戢耳葑[封]目。玩弄糟蹋。竟一任群獸之處分。 11頁

飼いならされた獅子だ!!飼いならされた獅子だ!!!わが中国は本当に飼いならされた獅子である。牙を隠し爪を縮め耳をおさめ目を閉じ、もてあそばれ踏みつけられとうとう獸の群れにやられ放題である。

アメリカの研究者ラインシュが中国問題を第三者の立場で論じる。喋血生は「我中国」と記して当事者の視点から記述する。列強のほしいままに蹂躪されている母国中国を同時代に直視

せざるをえない喋血生にとって冷静な評論文を書くのはむづかしい。悲憤慷慨の論調になるのもしかたがない。それを受け容れたのが『浙江潮』という東京で刊行されていた雑誌だ。喋血生が文中で「我中国」となども主張するところに注目する。喋血生の意見が直接的に表明されているからだ。吉武を単に漢訳した文章ではそういう表現にはならない。

吉武と喋血生では論評する視点が違う。章題、内容、表現も異なっているのが上の冒頭部分だけでも理解できる。

喋血生は第1章において、20世紀になって諸外国が世界政策と称して「わが中国」の門戸開放を強制し「わが中国」はそれを許した原因を追究する。

原因1は「善講大同学〔大同学を重んじがちである〕」（12頁）だ。大同とはあらゆる差別がない自由平等平和な社会を構想する。そこから民族思想の欠落が生じるというわけ。喋血生は述べる。「わが国人には民族思想がなく極点にまで達している〔我国人無民族思想至于極点〕」（12頁）。吉武で該当するのは「他国ノ文明ト接触セスシテ久ク孤独ニ居リシコトハ支那人民ニ愛国心ノ発達ヲ妨害シタリ」（108頁）である。

原因2は「善解同化力〔同化力を理解しがちである〕」（13頁）だ。中国文化は異民族をも同化する力を有している。喋血生は述べる。「わが中国民族は同化力でもって最もよく人を服従させる〔吾中国民族。最能以同化力服人者也〕」「満人のように中国中央部に入るとわが中国の古くからの訓戒、古い制度に従わないものはいない〔即如満人入関不從我中国之古訓旧制〕」（13頁）。吉武で該当するのは「支那ノ社会ノ氣質及ヒ文明ノ精神ヲ講究スル者ハ必スヤ先ツ其顯著ナル純一性及ヒ同化力（Homogeneous Character and power of assimilation）ニ就テ驚カサルハ無カルヘシ。屢次外敵ノ侵入ニヨリ受ケタル支那ノ敗績ハ會

テ其古来ノ道義又ハ政体ニ何等ノ印象ヲ残サス、却テ戦勝者ハ支那ノ流儀形式ニ陥ルヲ常トス。斯クテ最後ノ勝利者——満人——ハ支那古訓旧制ノ根本的保守者トナリ果テタルニ反シテ、真ノ漢民族自身ハ改革党ヲ養成シツ、アリ」（99-100頁）である。

吉武が第1章で述べているのは章題に示すとおり支那の社会と政治の特質である。

実態のひとつは「過去崇拜（Reverence for the past）ニ在リ」（100頁）、個人の場合には「祖先崇拜」（100頁）だ。さらに愛国心の欠如がある。「治者側ノ絶望的腐敗及ヒ頑冥不靈ハ被治者側ノ非常ノ怯懦及ヒ愛国心ノ缺闕ト相并立シ」（96頁）。加えて政治的組織と政治思想だ。「此帝国ノ現在ノ脆弱ハ各個人ノ劣性ニ因ルニアラス、実ニ不秩序ナル政治的組織及ヒ謬妄ナル政治思想ニ帰セサル可カラス」（96頁）。社会の構成が士（有司と学者）農工商であること。また科举制度に関係してその教育方法が「国内ノ青年ヲ挙テ無氣力、愚蒙ナルラシムルニ終ル」（103頁）という。

それらが混合原因となって中国国家全体が衰退したという認識だ。

吉武が翻訳した支那の衰退原因は喋血生の分析と一部が重なるが大部分は別物である。

## 第2章

喋血生の「第2章 中国特贈於異種之権利〔中国が外国に特別に与えた権利〕」は吉武の「第2章 外国民ガ支那ニ於テ獲タル利益ノ実質」（117頁）だ。中国側から「与えた」ことは外国からすれば「得た」ことになる。

最初にでてくるのは「利益範囲及勢力範囲（Sphere of interest and sphere of influence）」（14頁）である。吉武のままに英文も添えている。

吉武を見る。すなわち「富源ノ占取若クハ政治上ノ監督ノ預期セラレタル地方ヲ意味スルナリ」（70頁）だ。あるいは「抑モ利益範囲ノ述

語上ノ意義ハ一国民カ商業的及ヒ天然の利源開拓ノ優先權ヲ要求シ得ヘキ地域ヲ指スナリ。而テ勢力範圍ノ方ハ多少政治的支配權ヲ包含スルトノ説モアレトモ、概シテ前者ト換用セラルハナリ」(117-118頁)である。意味するところは同じ。列強が中国国内において天然資源開発の優先權、あるいは政治的支配權を主張する地域を指す。吉武の『世界政策』という書名は『帝國主義論』と訳されることもある。まさに列強の中国におけるやりたい放題を象徴するのがこの「利益範圍及勢力範圍」というふたつの用語なのだ。

吉武のあげる諸特權と喋血生の言及がどれくらい合致しているか対比する。

吉武	喋血生
鐵道特權 (119-139頁)	言及なし
鉱業特權 (139-145頁)	1 鉱業特權 (15-17頁)
宣教事業 (145-146頁)	伝教事業 (17-18頁)
最惠国条款 (146-147頁)	言及なし
海關稅務行政 (147頁)	言及なし
河川通行特權 (147-148頁)	言及なし
支那貿易統計表 (148-153頁)	2 貿易特權 (18-22頁) 表が一致する

鐵道は鉱山開発と密接に結びついている。喋血生が鐵道特權を説明しないのは不適切だった。吉武の説明は詳細だ。上を見れば喋血生の第2章は吉武を部分的に抽出し漢訳したことがわかる。抄訳プラス喋血生独自の記述である。

論文は中断するのだが締めくくりのようにして喋血生は説明をつけ加える。中国社会は商人を下卑た人間だと称していた。商業は賤業だと考えていた。外国人にそれをやらせてその結果が「わが国家[我宗社]」の転覆である。

ほとんど捨て台詞のようにして絶望の語句を書きつけてもいる。「今国民に一語を贈ろう。經濟がある分だけ自由がある。經濟を失う分だ

け國權を失うのだ[今且以一語贈國民曰。有一分經濟有一分自由。失一分經濟失一分國權]」(22頁)

第1章では中国衰退の原因をその文化に求めた。喋血生は自らの経験知識にもとづいて論じることができた。しかし第2章は列強の中国における侵略状況の具体的記述だ。喋血生はその知識を持たなかったから吉武を抄訳せざるを得なかったとわかる。

### 3 「斯賓塞快樂派倫理學說」

上に見たように喋血生論文のひとつは宗教だった(完結)。ふたつ目は政治だ(未完)。最後は倫理である。こちらも表示は未完になっている。

原著者はジョン・ワトソン(JOHN WATSON、1847-1939)、スコットランド生まれ、カナダのオンタリオ州キングストンにあるクイーンズ大学 UNIVERSITY OF QUEEN'S COLLEGE の道徳哲学(倫理學)教授(以下綱島)。章題にあるハーバート・スペンサー(HERBERT SPENCER、1820-1903)は「適者生存」を造語したことでも知られる。

『快樂派倫理』という書名が示す快樂とは、著者ワトソンによれば「快樂說(快樂を人生唯一の目的と見る學說を指す、原語 Hedonism の訳なり)」(3頁)である。

綱島と喋血生の冒頭を引用する。

【綱島】ハーバート、スペンサーも亦ミル、ベンザムと同じく、社会全体の最大快樂を、人生の究竟目的とする見解を持したりしが、快樂說と進化說とを結び合せたるは、其の二家と異なる所なり。167頁(注: BENTHAM は普通ベンサムと表記する)

【喋血生】何謂最大多数之最大幸福。驟読之。蒙被幾晝夜。未獲解。乃搜之於東西哲儒學說。頓悟最大多数之最大幸福数字。

即快樂の広義也。 41頁

最大多数の最大幸福とはなにか。これにわかに読んで、いく昼夜か解釈を得ることができなかつた。そこで東西の哲学学者の学説をさがすと最大多数の最大幸福とは快樂の広義であることをたちまち悟つた。

喋血生はいきなり「最大多数之最大幸福」を提出する。綱島の順番どおりに記述しているわけではない。綱島による上の記述は後回しにした。

「最大数の最大幸福」という言葉だけなら同書「第7章 ベンザムの倫理説」(126、141頁)に出てくる。イギリスの倫理学者ベンサム(JEREMY BENTHAM、1748-1832)が主張する功利主義は「社会的幸福の増進」(126頁)に重きを置く。すなわち「最大多数の最大幸福」が社会の目的だと考える。上の引用文に出てくる「社会全体の最大快樂」がそれに相当する。

西洋の倫理学だと考えて読み始める。すると喋血生はそこに「阿頼憶[耶]識」「仏」を挿入する。「人類が阿頼憶[耶]識(喋血生注：性靈)を持った時、先に快樂性を含んでいたと私は願うものだ[吾是以願人類有阿頼憶[耶]識時。先含有一種快樂性]」(41頁)。あるいは「仏は菩提樹の下で説法をして、喜びに満ちた顔を選ぶ者が本当の悟りを得るだろうといった[仏坐菩提樹下説法。扱有歡喜相者。許以得成正果]」(同頁)である。

喋血生の理解を示したものだ。仏説のあとに「イギリスの学者ベンサムが言うには、幸福を増加させるものが善であり、幸福を消滅させるものが悪である[英儒辺沁曰。使人増長幸福者為之善。使人滅障幸福者為之惡]」とつづける。その文脈で仏を出したとわかる。喋血生独自の解釈を付加したかったのだろう。身についた仏教理解の一端が自然に出てきた。

ここで喋血生は綱島とは関係なく中国事情について突然説明し始める。喋血生自身によるこ

この加筆記述を示す。次は本論文において重要な個所だ。

【喋血生】吾四万万同胞。無老。無少。無壯。無幼。無男。無女。無貴。無賤。是胎生至於涅槃。無一人得未曾有歡喜相。不陷於悲觀的。即陷于厭世的。沈沈長睡。如豕恋笠。於是他族異種。遂挾之為玩弄物。以増長其快樂。而自号先覺之士。更從而唾罵之。恐嚇之。使其於邑之氣。愈阻愈塞。俛俛何之。茫所端緒。嗚呼慘矣。夫一切衆生苦。即是我苦。苦一切衆生。寧使苦我。今願改絃易轍。使吾同胞。捨棄煩惱。以搏獅搏兔之能力。求快樂以踐人生究竟目的。

(後略) 42頁

わが4億の同胞は、老人少年の区別なく、壮年幼年の区別なく、男女貴賤の区別なく胎生から涅槃まで、ひとりとして未だかつて喜びに満ちた顔をしたことがない。悲觀に陥るのでなければ厭世に陥っている。時の過ぎゆくままに熟睡して豚が竹囲いに恋々としているようだ。そこで他民族外国人が力を頼みに慰みのもにして自分の快樂を増大させ自ら先覺の士だと大声で叫んでいる。さらには口汚く罵り、脅迫しその国の気分をますます閉塞させる。(中国は)迷ってどこに行くのか手がかりすらわかっていない。ああ悲惨なことだ。全ての生き物の苦しみはそのまま私の苦しみだ。全ての生き物を苦しめるならばむしろ私を苦しめてほしい。方向を変え、わが同胞に煩惱を捨てさせ、獅子も兎も打ち据える能力でもって快樂を求めることを人生実行の究極目的とするように今願っている。(後略)

「搏獅搏兔」という言い回しは喋血生「少年軍(三)」に出てきた。喋血生の書き癖らしい。

西洋人が異民族の中国に対して自らの最大快樂を自由勝手に追求しているというのが喋血生

の理解である。列強が加害者であり中国は被害者だ。中国の門戸開放問題を論じた時に言及していた。そうなる原因のひとつは中国古来からの大同学と同化力だった。それにより列強の圧迫を撥ねつけることができずに侵略された。その状態から抜け出すためには中国人こそが西洋人のいう最大快楽を自分のものとして求めて反撃すべきだ。これが喋血生の主張だ。ここには喋血生なりの叱咤激励をこめている。

倫理学の論文に当時の中国がおかれた政治の現実をどうしても投入せずにはいられない。それほど喋血生は憂国の情を強めていた。

だが喋血生の理解は綱島からは逸脱している。最大快楽が追求されるのはそれぞれの国の国内状況である。諸外国との関係は別問題だ。しかし喋血生にすれば最大快楽を追求する列強とその侵略対象になった中国という外交関係という解釈に到達するのだった。諸外国が目前で中国を圧迫侵害しているという現実が喋血生の思考をつき動かしているからだ。

喋血生は自分の考えを表明したからそれで満足したらしい。ここ以降は綱島の記述を追跡する方向に舵を切る。

喋血生はそこで綱島にない「快楽と進化並行之真理」を章題として設定する。そこで綱島の冒頭部分をあらためて取り出す。

【綱島】ハーバート、スペンサーも亦ミル、ベンザムと同じく、社会全体の最大快楽を、人生の究極目的とする見解を持したりしが、快楽説と進化説とを結び合せたるは、其の二家と異なる所なり。 167頁

【喋血生】斯氏学説。以社会全体之最大快楽。為人生究極目的。無異於辺氏。唯独據快楽と進化両説。相繫並行。 43頁

スペンサーの学説が社会全体の最大快楽を人生の究極目的とするのはベンザムと異ならない。ただ快楽と進化の両説を結び合わせることによって並行させたのだ。

綱島はここからは主として単純から複雑へと変化する進化の原則について述べる。

綱島が「普遍法の一形式」(168頁)と書けば喋血生は「普遍法的形質」(43頁)と呼応する。その原則について「現世界が、同質より異質に、不明確より明確に、不定着より定着に進みゆく過程を指すなり」(168頁)とあれば「是現世界由同質進於異質。疑惑進於解析。否定進於肯定。単純進於複雑。所經過之一程耳」(43頁)と同質異質は共通だ。不明確、不定着は疑惑、否定と単語を変え、単純複雑をつけ加えた。

綱島が「行為の科学的法則」(170頁)を見いだす必要があるという。しかも該本章においては「後にゆづりて」論じないと書いた。喋血生は「行為科学的法則」(44頁)と綱島と同じ表記を使用する。だが論じないという部分を省略したから読者にしてみれば単語だけが放置された印象が残る。

綱島が記述するのは進化論の側面だ。

行為とは「道徳上の行為」(171頁)、「道徳的行為」(172頁)、「道徳的と称せらるゝ行為」(177頁)を指す。「道徳」がついている。それと「全体の行為即ち「普遍的行為(Universal conduct)」」(綱島170頁/喋血生44頁)との関係を論じる。すなわち道徳的行為は普遍的行為の一部現象である(172頁)。行為といっても細かく区別して説明している。

行為と進化との関係は「行為の進化して、適応作用のますます複雑となるや、種族全体の保存、及び発達も、同時にまたますます完了せらる」(174頁)となる。言い換えれば「最善の行為とは最も進化せる行為、即ち個人及全体の厚生のために、最もよく適したる行為其者に外ならず」(176頁)である。道徳的行為も進化法という根本真理に従って発展する(177頁)。さらにその行為を物理学、生物学、心理学、社会学に分けて分析した(喋血生はこの部

分のおおよそを漢訳した)。

本章の結論は「絶対的倫理とは、「完全に進化したる社会に於ける、完全に適應せる人の行為則を編みたる」もの、と言ふことを得べしと」(184頁)である。

喋血生は綱島の使用する単語をほぼそのまま漢訳して使用する。

前述のとおり喋血生は「道徳的」という単語は基本的に省略した。単に「普遍的行為」だけを提出する(「道徳的行為」は単語として1カ所だけ(46頁)を残すが説明はしない)。綱島が道徳的行為について考察する箇所は煩雑だと判断して素通りしたということだ。そうして「普遍的行為とは順序を集めたものである[普遍的行為。是最次序的也]」(44頁)と言い換える。そこから「行為の進化は種族の保存と結びつき切り離すことができない[行為之進化。与種族之保存相結而不可解]」(同前)と述べて綱島の説明に直結させた。

喋血生の漢訳で1カ所だけ不審な部分があることを指摘する(下線筆者)。

【綱島】又一方に軍事組織あれば他方に工業制度ありて両々相容れざるの觀をなすなり。されど、社会は、実に此くの如き必然の径路を辿りて、徐々其円満の境に進む外は非ず。 181頁

【喋血生】是社会複雑時期。則此方有軍事組織。他方乃有実業制度。於是競争復起於現象。然則社会主義者。愈競争而愈圓合。 46頁

社会が複雑な時期ならば、こちらに軍事組織がありあちらに実業制度があつてそこでまた競争が起こるという現象になる。しかし社会主義は競争すればするほどますます円満になるのだ。

過渡期の矛盾状態を経て進化するという文脈である。そこに突然「社会主義」が出てくるの

は奇妙だ。「社会」と「社会主義」は異なる。誤植ではないかと疑う。

綱島の結論をもう一度示す。「絶対的倫理とは、「完全に進化したる社会に於ける、完全に適應せる人の行為則を編みたる」もの、と言ふことを得べしと」(184頁)であつた。

喋血生は自分なりにまとめて「それスペンサーの絶対的倫理学説とは快樂と進化を結び合わせた意味である[夫斯氏絶対的倫理学説。使快樂与進化維繫之義]」(47頁)とする。ここは綱島が冒頭で「快樂説と進化説とを結び合せたるは」と書いているのを利用した。

結びの部分にある喋血生の解説も綱島にもとづいている。

【綱島】此かる相資相輔の性質を有するに至るべきは、疑を容れず。現在の社会にありてだに、美術上の天才と称せらるゝもの、即ち、詩人画家楽人の如きは、いづれも直接自家に快樂を与ふる事業を執つて、其生を支ふると同時に一方には之によりて以て、直接間接に、他人の快樂をも増進しつゝあるなり。又、与ふるものと受くるものとの双方に快樂ある彼の慈善的行為の如きも、こゝに所謂絶対善の一例に洩れざるものと見るべし。 183頁

【喋血生】如形影相隨。為人類鼓鑄。相資相輔之性質。使不悖於社会的生活。例如慈母之愛穉子。穉子之恋慈母。美術詩画音楽家所執皆為直接自家快樂事業。然能以直接生間接。使他人受其感触者。増進快樂。故進化圓滿時期。凡属社会生活事々物々。皆得『双方快樂』之趣味。 47頁

(快樂と進化は)形と影が寄り添うように人類に鑄造され、相資相輔の性質は社会の生活を矛盾させない。例えば慈母の幼児を愛するように幼児は慈母を恋慕する。美術では詩人、画家、音楽家が行なっていることはすべて直接自家を快樂にさせる事業

であるが直接が間接を生じさせることができる。他人にその感動を与えて快楽を増進させるのだ。ゆえに進化円満の時期にはおよそ社会生活に属するすべての事物はみな「双方快楽」の興趣を得る。

綱島は「絶対善」について説明した。喋血生はそれを「絶対的倫理」のものだとして置き換えている。

慈母と幼児の関係については綱島の「絶対善の実例を現在に求めんか、健康なる母子の関係の如きは、明らかに其の一なるべし」「母は子を抱くの喜悅ありて、而も子はその乳を飲むの満足ある」(182頁)にもとづく。

以上のとおり喋血生の説明は綱島に見える表現を抜き出して再構成している。綱島にもともとあるものだから喋血生の記述には根拠があることになる。ただし喋血生による加筆部分はその範囲内にはおさまらないことは明白だ。

文末に「未完」と表示する。しかし喋血生の文章は第9章「スペンサーの倫理説」全体を覆っておりその限りでは終了している。続けて「第10章 ハーバート、スペンサーの倫理説(続)」に進むつもりで「未完」としたかどうかはわからない。考えるに第10章はスペンサーの倫理説を批判しているから喋血生としては具合が悪いのではないか。「完了」とあっても不思議ではないところだ。

#### 4 結 論

喋血生の評論文3篇である。内容は宗教、国際政治、倫理という分野にわかれる。

喋血生は複数の文献を材料として独自の論文として作成した。あるいは明記した参照資料は1篇だが喋血生にはもともとその全文を直訳する考えがない。日訳は参照資料として使用しながらある部分は省略、要約し語句の前後を入れ替えて内容を紹介する。必要だと考える個

所には喋血生自身の意見を挿入して主張するのが論文の主要目的だ。独自の考えが資料の日訳と矛盾するものであっても気にしない。これが喋血生の立論方法である。

一見するとその3分野は関係がなさそうだ。しかしそれらの根底に「当時の中国情況」という鍵語を設置すれば3者が結びつく。

ひとつは宗教だ。救世軍の創設者夫妻を紹介する。それだけに終わらない。困窮者救済作戦を実行する外国に中国を推薦することを忘れない。「香りの高い花」でたとえられる救世軍が中国に進軍することを喋血生は願望した。中国は救世軍を必要としているという主張だ。

ふたつは政治である。列強が圧迫する対象は中国にほかならない。中国の現実を直視すればそうなった原因を考えることにつながる。それについての喋血生の考えが展開された。参考資料には縛られない。

最後に倫理を出す。外国が追求する「社会全体の最大快楽」の対象こそが現実の中国だと認識する。つまり外国が中国に対して最大快楽、最大幸福の実現を実行した結果が侵略というかたちで出現した。中国も同じく最大快楽を実践して反撃するよう願望する。

以上、中国情況を鍵語にすることで3分野が関連するものになっている。逆にいえば喋血生はどのような内容の日本語資料を参考しようとも自分が重要だと思う中国事情に結びつけて追加説明しただろうと推測される。 罫

#### 【注】

- 1) 梁艶+王玉「喋血生：曇花一現的清末小説翻訳家」『清末小説から』第136号 2020.1.1。略号[梁王136]
- 2) ヘンリー、ブラード編輯『救世軍戦争記』救世軍本営1901.3.2。国立国会図書館デジタルコレクション。34頁に写真「東京に於る救世軍の行軍」がある。また「軍歌は通常楽器に合せて之を歌ひ升。

殊に大太鼓は最も広く用ひられて居る。救世軍の集会では政治上の事など一言も説ませぬ。只福音の心理を説明し、又銘々が受たる御恵を証言すること故、固より滅多に反対者の妨害はありませぬ(32頁)、「野戦には士官及び兵士が軍旗を立て、太鼓をうち、行列を造つて軍營附近を行軍し、又所々に立留つて凡そ十五分間宛も、集会をするのが例である」(33頁)と述べる。東京での行軍状況だ。イギリス本国、あるいは諸外国において初期行軍が妨害されたというのが東京では違つたらしい。

- 3) ウ井リアム・ブース著『軍令及軍律 兵士の巻』救世軍日本本営1903.8.27。目次、本文は「救世軍の軍令及軍立 兵士の巻」。国立国会図書館デジタルコレクション

「六、「軍令及軍律。戦場士官之巻」に左の一節あり。／軍隊が政府に対する関係は、「我等は此世の属(もの)にあらず」との主義に由て定まるものなり。救世軍人は既に此世の属にあらず。而して政府は専ら此世に属し、其為す所は更に神の旨と、其聖国の利害を顧慮するものにあらざるが故に、之に対して深き同情を寄すること能はざるものなり。／戦場士官、大隊長、聯隊長、師団長等は、救世軍の建物を、政治の集会、又は救世軍と異なる目的の事に使用する為、貸与すること能はず。143頁

- 4) 救世軍が受けた迫害については次を参照した。

前出ヘンリー、ブラード編輯『救世軍戦争記』救世軍本営1901.3.2。7-8頁。

「救世軍の世に現はれたる以来、市井の暴徒に迫害せられたる例は、極めて夥しいことであり升。其のみならず或時は政府から誤解せられ、色々難義を致したこともあつて「救世軍人は断頭台上る他、あらゆる艱難辛苦を嘗め盡したと称へられて居ます。」。注：「断頭台上」上つてはいない。

ほかにもある。室山軍平『ブース大将伝』救世軍日本本営1906.8。国立国会図書館デジタルコレクション

「当時外部の反対迫害は、非情なるものにて、或時は十二人の会員が行軍して、造船所の辺迄参りたるに、其一人も負傷せずして帰つたる者はな

く、内四人の婦人は、四人共皆、顔に紫色の痣をこしらへられました」137頁。

「第三に、救世軍に最も手強き迫害を加へたる者は、頑迷なる当局者である。即ち救世軍を以て徒らに事を好む者、又は好んで平地に溝を起す者と、誤解したる警察官、裁判官等であつた。彼等は人間の社会に横溢する腐敗と、罪惡とを一切塗抹し、所謂『臭い物に蓋する』方針に由て、一時の泰平を謳歌する者である。偶々人たつて、根本的に世を救はん為め、社会の病根に手を触るゝ時、彼等は驚き且怒つて、忽ち其人を捕へ、之を迫め、之を牢獄に投ぜずしては満足せざる者である」211頁

「救世軍は殊に其草分の時代に於て、到る處石を投げられ、唾きせられ、水をあびせられ、打たれ、殴かれ、又は腐れ卵を投げつけられなどして、居た者である。救世軍人は、八犬伝の犬田小文吾の如く、其父上から、人と争ふこと勿れとて、指に封印せられて居る者である故。之に敵対ふ人々は、そこを見込んで、勝手なる乱暴を試みた者である。即ち救世軍人の、仇返しをしない處を見つけ込んで、之に有ゆる迫害を加へたる者であります」212-213頁

「即ちセツホ井ルド、バツス、ギルドホルド、アルブローズ、ホルファー其他に暴徒が起つて、盛んに救世軍人を襲ふ傍から。警察官、裁判官は又乱暴人を差置き。専ら救世軍人を捕へて、之を監獄署に投じたる者である。同年中、救世軍人にして乱暴人の為に蹴られ、打たれ、傷けられたる数は、本営に知れたる丈にて六百六十九人。内二百五十人は婦人、又廿三人は児童であつた。(中略)又同年中救世軍人の、捕へられて監獄署に投ぜられたる者は八十六人、内十五人は婦人であつた」213頁

「或記者が、『救世軍人は瑞西に於て、絞首台上に登る外、一切の迫害を受けたり』と申したるは、實際を穿ちたる言である」216頁

- 5) 反対派がどのように評するか例をひとつ示す。無署名「(時事評論)「サルヴェーション、アーミー」(『智徳会雑誌』第21号 1895.11.18。国立国会図書館デジタルコレクション所収)である。

「所謂救世軍なるもの、一派近時英国より海を越へて我邦に来る、(中略)此派英国に於ては十余年前ブーズの工夫より一種の手段を案出し、貧民

を扇動し貴族富豪を恐迫し而して救済費金を出さしむ、然らば我邦に来るの主義目的亦此軌道を出でざるべし(後略)」27頁

林譯《花因》、《想夫憐》、《眇郎喋血記》  
原著鑒定・補遺於林紓偽訳《名家點將》

古 二 德

#### 《花因》翻譯小説原著

(英) 幾拉德原著者，林紓、魏易合譯，光緒33(丁未)年2月2日至3月10日(1907年3月15日至4月22日)刊於上海《中外日報》第三頁。幾拉德即蘇格蘭小説家Dorothea Gerard(1855-1915)原著者，原著爲《Etelka's Vow》(Eden, Remington & Co.出版，倫敦，1892年)。

《花因》雙語開頭對比如下：

The April day had been wet and dark, but in the *Extra Zimmer* of the "*Erzherzog Leopold*" the blinds were pulled down and the gas turned up, and for the present the drops were trickling down the window-panes, unheeded and unheard. The *Extra Zimmer* was a very moderate-sized apartment, with a smoke-stained low-vaulted ceiling, but with spotless damask and irreproachable saltcellars on each of the four tables, which were all the space

admitted of. Two of these tables stood in the deep window embrasures, and in one of these recesses a party of some half-dozen men were having their supper, or rather were letting it grow cold over the point they were discussing. So eager was the argument, that the youthful couple who had taken place at the table directly under the gas, as well as the one man who had the second window embrasure all to himself, could not well avoid hearing every word of what was spoken.

The solitary occupant of the window embrasure looked in age nearer forty than thirty. He was a thin man with something military in the carriage of his square shoulders, a lean brown face, tanned it would seem by many suns, a brown beard with a dash of red in it, and singularly steady blue-gray eyes, which accorded strangely with that dark face, and whose colour seemed to suggest that the complexion had originally been fairer. The hand, too, with which he held the evening paper was gaunt and dark, scarcely the hand of an idler or a stay-at-home.

When the voices beside him began to rise, he leisurely turned his head and threw a glance toward the next table, then calmly returned to the perusal of his paper, or, at any rate, continued to hold it before his face.

一日爲西歷四月。天陰欲雨。維也納城李倭波兒大公飯店樓窗四閉。煤燈已上。而狂

溜自簷際徐落。樓中人若無聞無見者。店屋初不甚曠。屋瓦亦低。霉黑久不汎埽矣。屋中長案。皆加以素罩。五味之瓶。及坏匙之屬。嚴潔可人。惟屋中僅容四案。二案臨窗而設。有六七人方據一案夕餐。實則聚訟紛紜。饌核已冷。都不之恤。而議論甚囂動。雖距長案之末。亦了了聞之。至聲達隔座。

尚有一案。則僅一人獨酌。其人年可三十以外。胸挺膊廣。大類刀鏢上人。臉長而瘦。似飽飫風霜。方成此狀。晴作藍色。望之似鎮定有謀。以理度之。此君年少時。亦必溫馴可親。手中方持晚報而指爪亦黑瘦。似非坐享而不更事之人。方隔座隆沸時。則亦引目斜視。既視則復讀報。

除譯之外，林紓尚撰題端，原刊於《中外日報》頭版：

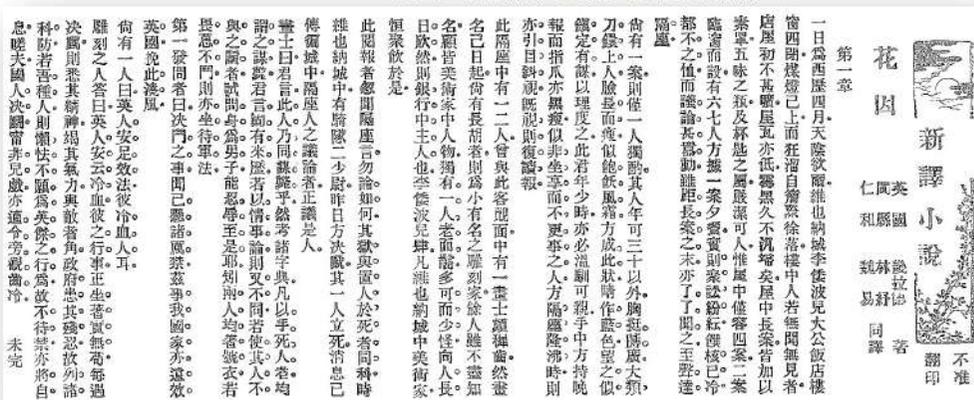
奧國多聲息花。徧檢百科全書，乃無圖。蓋卽乳香也。馬林奴波兒，花氣熏天地。居人成老於花中，生死亦猶花之開落，而於美人尤肖。此書情跡，均在花時，則以聲息花爲美人生死之因。觀此，能尋因而證果，則溫柔鄉里事，亦不過一花落花開耳。

李艷麗認爲此段語表示林紓對封建制度下之女性有深深的同情心\*1。雖然許多林紓序跋提倡女性教育、權利及自由戀愛，但此段語實則指稱《Etelka's Vow》第三章中Gerard所描述的「匈牙利鄉村小鎮之風景如荒、社會闕如，均令人極度厭倦」\*2：

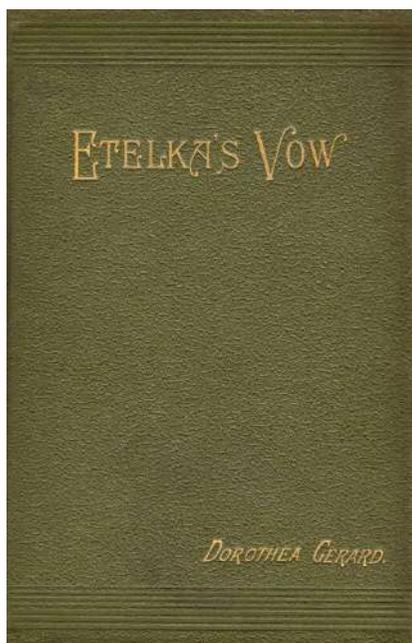
The long, low houses of Marianopol, whither Viktor was bound, lie like an island in the midst of a sea of flat *puszta*.

(匈牙利語，意爲原草) [...] Wherever shade is urgently wanted acacias (林譯爲「聲息花」) have been planted, being the tree that best stands long droughts. In the time of their full blossom the scent is almost suffocating. There is no escape from it anywhere: it swallows up all other scents; even the grass and the tender new vine-leaves seem to have been steeped in acacia-scent. When the flowers come to drop they shower like rain; every ditch and every cart-rut is full of them. [...] A month after the last blossom has fallen and a mile out on the plain, withered acacia flowers are still found wandering restlessly about over the short grass. (頁27-28)

《Etelka's Vow》故事設定於虛構駐軍鎮「馬林奴波兒」(Marianopol)，位於匈牙利貝斯卡區，多瑙河與蒂薩河之間。女主角Etelka乃是一位在女修道院長大的情緒化女性，她初戀情人因美國決鬥而自殺。女主角盡力向對情人之死負責的男性進行報復，但正如光陰易逝，記憶亦如此慢慢褪色。經過幾個寒暑Etelka與一位藝術家成婚。隨後她意識到丈夫即她發誓要報仇的男性。驚恐萬分，Etelka臥病不起，死於腦熱症。Gerard乃是一位相當傳統主義作家，與Etelka相同亦在女修道院長大。此書反映作者居於匈牙利的生存狀態，而與女性權利無關。



插圖一：《花因》第一章。



插圖二：《Etelka's Vow》，1892年，倫敦初版封面。

### 《想夫憐》長篇小説原著

(美) 克雷原著者，林紓、毛文鍾合譯，1920年9月25日至12月25日刊於《小説月報》第11卷第9號至第12號。

克雷即英國小説家 Charlotte Mary Brame (1836-1884)，原著為《The Broken Trust》，原刊於《New York Weekly》第54卷第39號至52號，1902年載於The Bertha Clay Library 第147集，1917年再載於New Bertha Clay Library第8集（兩版由紐約Street & Smith出版）。Brame以筆名Bertha M. Clay 登載於美國，因此譯者認為作者為美國人。

除《想夫憐》之外，克雷著者林譯小説尚有三種原著不詳：《金縷衣》、《黃金鑄美錄》及《孝女履霜記》，均與毛文鍾合譯。以筆名Bertha M. Clay可統計536部書，包含The Bertha Clay Library（共有512部，至少兩部重複），New Bertha Clay Library（共有458部，但惟有7部未載於The Bertha Clay Library）及獨立出版的19部。筆者祇得點檢131部，均無與林譯三種相符。然而，應當指出，Brame以筆名著書大概惟有20部，可是離世後，出版商繼續使

用該名。由此可斷，克雷著者林譯小説並非Brame所著。

《想夫憐》雙語開頭對比顯示譯者刪減原文幾部分。筆者在別處已提出，毛文鍾譯意準確，可是體式粗率慌張，脫段誤詞，因此鑒定原著非常艱巨\*3。例如《想夫憐》開頭兩段：

A June morning, on the outskirts of a dense Australian forest; the sun shining over massive trees, whose roots were hidden by wondrous plants; on deep jungles where, when the sun set, wild burning eyes shone, as the devourer sought its prey, on "strange, bright birds with glittering wings;" on brilliant fireflies, gleaming among green foliage; on tall, tufted grass, and flowers of every shade and hue.

A deep blue sky above and a faint whisper from the summer wind as it roamed at will amidst flowers and trees; a deep, dense forest, untrudged by human feet; a solitude vast and profound, no sign of human habitation, save from the little hut where Alan Wayne lay dying.

翻譯削減如下：

歐洲有一叢薄中。隱一草廬。廬中有一病人。名阿蘭。懨懨且斃矣。

譯者不僅錯譯「Australian」為「歐洲」（或許林紓錯聽「奧」為「歐」），而且描述中所有詳細信息均刪減。然後譯者省略兩段英文，才續譯：

Before the hut was a space of clear ground; then came a steep hill, and across some acres of land, evidently cultivated by

English hands, one saw the road leading to the town of Otana, a distance of seven English miles from the hut.

門外有地數畝。去阿他那城可七英里。

者再次省略五段英文。翻譯繼續如下：

he shadows moved, the sun grew less warm and light; there was a lull in the summer wind, and then, from afar off, came the sound of a loud, long whistle.

That is Paul," said the pick man to himself. "Thank God, I shall not die alone!"

昏後風靜月明。有人聲自遠而近。阿蘭歎曰。是必保羅來也。吾命或不盡盡。

此後翻譯雖稍稍刪減，然體式改善，似乎毛文鍾決定刪省無關緊要細節，例如風景描述，重視個人互動：

Then came sharp, swift footsteps, and in a few minutes another man entered the hut—a strong man, with youth, health and strength in his face. He held a packet of letters in his hand, and a bottle containing either medicine or wine. He went over to the bed, and the sleek man's eyes were raised to his with a question in them.

"It is all right!" said Paul Lynne. "The English mail came in yesterday. There is a packet of letters for you. You must not touch them until you have drunk one glass of wine. I have walked fourteen miles for it."

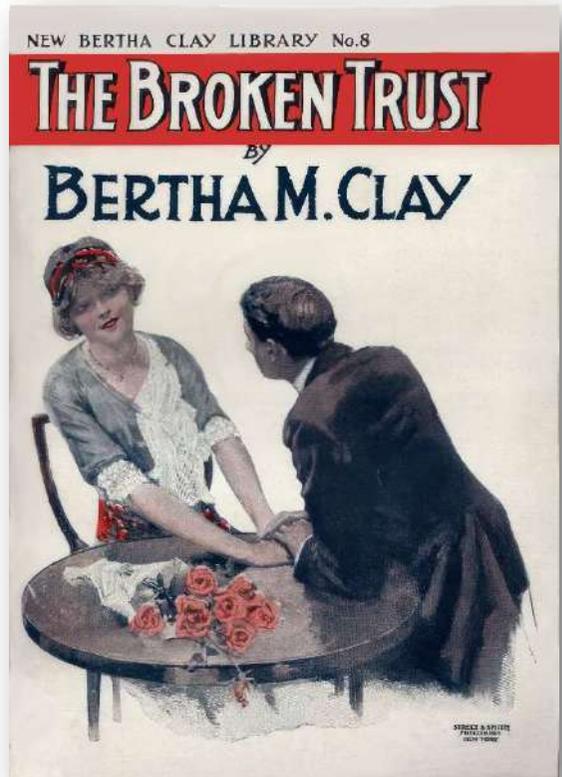
"You are very good," said Alan Wayne, while a deep, red flush woke up the white pallor of his face. "Let me have the wine, and read the letters now—at once—ah, me, if it should be—the property and the title at

last!"

幾分鐘後。果有健碩之少年。手一書並一瓶酒。言曰。爾所命事。吾已斡旋畢矣。此一書由英倫來與爾者。惟爾讀書後。須先飲杯酒。此酒吾挈之。行十四英里矣。阿蘭曰。吾得酒後。或吾家遺產及爵位。咸在此書之中。



插圖三：《想夫憐》第一章。



插圖四：《The Broken Trust》，1902年，紐約初版封面。

《眇郎喋血記》未刊林譯小説原著

林紓離世後，尚有未刊譯稿17種，共90冊，原以寄商務印書館付梓，可是1932年「一・二八」事變爆發，商務編譯所遭到日軍炮火炸毀而停業，譯稿均失傳<sup>\*4</sup>。幾部分譯稿亦存於林紓夫人楊鬱處，1955年捐獻北京圖書館，現藏於中國國家圖書館古籍館<sup>\*5</sup>，據筆者所知，遺稿凡6種：《鳳藻皇后小記》（克雷夫人原著者為Bertha M. Clay），《學生風月鑑》（大仲馬原著者為Alexandre Dumas père），《奴星敘傳》、《奴星敘傳二編》（法國洛沙子原著者，或許Léonie Rouzade），《眇郎喋血記》（阿克粹原著者為Baroness Emma Orczy）及哈葛德（H. R. Haggard）未定書名翻譯。其中《眇郎喋血記》譯稿，由書名可推原著。

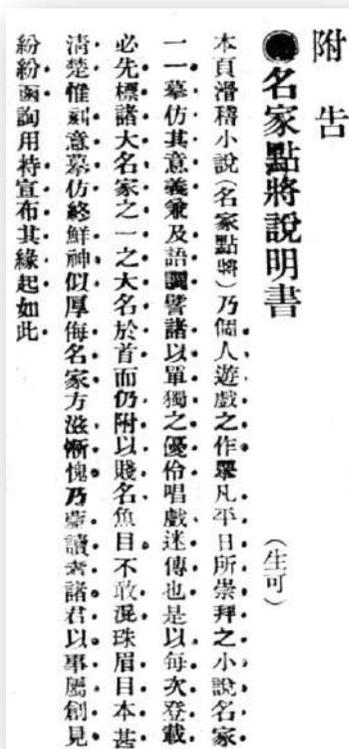
阿克粹即匈牙利裔英國作家Baroness Emma Orczy (1865-1947)。1908年10月由林紓、魏易已合譯《大俠紅繫露傳》，原著為《The Scarlet Pimpernel》(1905)。此原著者音譯為阿克西，與阿克粹相同。《眇郎喋血記》譯稿遺失，但可推斷故事講述一位失明青年報復仇恨。書名與《The First Sir Percy》(1920)內容相符，Orczy惟一部以盲人英雄為主角小説。該書亦為林譯《大俠紅繫露傳》前傳。

補遺於林紓偽託《名家點將》

《名家點將》滑稽小説，刊於《時事新報》1913年3月21日至25日，共有三章，根據新報所記，「閩縣林紓、仁和魏易同譯」，譯名之下貼「(生可)」，即指稱潤文者（修改潤飾文字編輯）錢生可。因此學者假設《名家點將》為林譯，可是《時事新報》1913年3月24日由錢生可附加說明如下：

本頁滑稽小説（名家點將）。乃個人游戲之作。舉凡平日所崇拜之小説名家。一一摹仿其意義。兼及語調。譬諸以單獨之優伶。唱戲迷傳也。是以每次登載。必先標諸大名之一之大名於首。而仍附以賤名。魚目。不敢混珠。眉日本甚清楚。惟刻意摹仿。終

鮮神似。厚侮名家。方滋慚愧。乃蒙讀者諸君以事屬創見。紛紛函。詢用特宣布其緣起。如此。<sup>\*6</sup>



插圖五：〈名家點將說明書〉，《時事新報》（1913）。

再者，第二、三章標題分別為「不才」、「指嚴」，均指稱許指嚴（1875-1923），清末民初小説家、翻譯家。1911年，許指嚴以「不才」筆名於《時事新報》發表定期專欄〈俳諧文〉、〈說叢〉，隨後寫作《毒蚊會》滑稽小説（1912年8月7日至9日）、《旁聽席物語》政治小説（1912年9月14日至11月21日）及《餘殃記》社會小説（1913年1月25日至4月24日），均刊於《時事新報》。許指嚴、錢生可亦合譯美國白福庇著（Guy Newell Boothby）者《盜巢艷跡》偵探小説，刊於《嶺東日報》（1908）<sup>\*7</sup>。由此可判，《名家點將》即許指嚴、錢生可合仿短篇小説，非林魏合譯。 □

1) 李艷麗，《清末写情小説における「女性」—近代初期文人の女性をめぐる肖像とその在り方》，東京

- 大學，博士論文，2014年，頁61。
- 2) Helen C. Black, 《Pen, Pencil, Baton and Mask: Biographical Sketches》, 倫敦, 1896年, 頁155。
- 3) César Guarde-Paz, 〈Lin Shu's Unidentified Translations of Western Literature〉, 《亞洲文化》第39期(2015年8月), 頁12。
- 4) 參見胡寄塵, 〈林琴南未刊譯本之調查〉, 《小説世界》第13卷第5期(1926年), 頁43-45; 〈劫灰中之林琴南未刊遺譯〉, 《浙江圖書館館刊》第2卷第1期(1933年), 頁150; 姚一鳴, 《中國舊書局》, 金城出版社, 北京, 2014年, 頁110。
- 5) 馬泰來, 〈林譯遺稿及《林紓翻譯小説未刊九種》評介〉, 《清末小説》第31號(2008年12月), 頁36-44。
- 6) 錢生可, 〈名家點將說明書〉, 《時事新報》1913年3月24日, 第4張第3版。
- 7) 筆者未見。由書名、章數, 可推原著為《The Beautiful White Devil》(1897年, 16章)或《A Stolen Peer》(1906年, 章數不明)。

## 清末小説から

### 葉新『張元濟和早期商務印書館——近代出版史散論』

北京・中央編訳出版社2023.1

從《張元濟日記》看商務印書館的對外交流與合作

商務印書館與英國朗文早有來往

張元濟《環遊談薈》研究

遠遊歐美, 心系館務——從1910年張元濟環遊之旅中的一封信談起

1913-1914年北美報紙驚現張元濟報道

1910年張元濟美國東部考察之行考証

新見《張元濟氏壯遊談》略析

張元濟1910年美國工程初探

新見張樹年《新政協會待行雜述》簡析

商務印書館和商務報館的名稱糾紛

商務印書館與麥克米倫出版公司早有來往

90年前的一場中外版權糾紛

胡適晚年評價商務印書館

鄭富灼——商務印書館英文部的開創者

英美大報視野中的早期商務印書館

“世界文學名著”叢書的主編是誰？

“為苦難的中國, 提供書本, 而非子彈”一語何來

中英出版界的一次“親密接觸”

《高鳳池日記》的出版史料價值

商務印書館收回日股合同的發表

商務印書館中的“楊家將”

1911年商務印書館和美國金恩公司的版權官司始末

附錄：錢歌川的《傲慢與偏見》翻譯連載

附錄：愛丁堡大學書史專業碩士教育淺析

附錄：《古今圖書集成》入藏大英博物館研究

附錄：漫談約翰·戴出版社的史料館藏

附錄：試述郭高燾等對英國書業的認知

附錄：《申報》“讀書俱樂部”副刊研究

附錄：北平人文書店書目初編(1932-1937)

范 祥濤○『科學翻譯影響下的文化變遷——20世紀初科學翻譯的描寫研究』上海譯文出版社2006.10

李今主編、羅文軍編注○『漢譯文學序跋集』第1卷1894-1910 上海人民出版社2017.12

李今主編、羅文軍、樊宇婷編注○『漢譯文學序跋集』第2卷1911-1921 上海人民出版社2017.12

李今主編、羅文軍編注○戰爭、革命、人之觀念的交織與流變——《漢譯文學序跋集(1894-1949)》序論 『漢譯文學序跋集』第1卷1894-1910 上海人民出版社2017.12

梁冬麗、劉曉寧整理○『近代嶺南報刊短篇小說初集』上下 南京·鳳凰出版社2019.1

王飛仙著、林紋沛譯○『版權誰有？翻印必究？——近代中國作者、書商與國家的版權角力戰』台灣商務印書館股份有限公司2022.5

梁 冬麗○『近代嶺南報刊小說研究』南京·鳳凰出版社2022.12

李 今○『魯濱孫變形記：漢譯文學改寫現象研究』北京大學出版社2023.3

康 鑫○『中國近現代報人小說與報刊新聞的互文性』北京·中國社會科學出版社2023.3

孫 超○『民初上海小說界研究(1912-1923)』上海古籍出版社2023.6 中華典籍與國家文明研究叢書

王 慶華○論文言小說叢書與“說部”概念之互動建構 『明清小說研究』2023年第3期(總第149期) 2023.7.15

任 祖鏞○對宣鼎生平及履歷中的相關問題考辨 『明清小說研究』2023年第3期(總第149期) 2023.7.15